

# 2016年度鳴門市人権地域フォーラム

## テーマ 「ひとつと」から「わがこと」へ

～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～

■と き 2016年8月10日(水)13:30～16:30

■ところ 鳴門うずしお会館

コーディネーター A(藍住町立藍住中学校教諭)

パネリスト B(板野中学校1991年度卒業生)

C(板野中学校1991年度卒業生)

D(板野中学校1991年度卒業生)

### 《司会者》

本日の人権地域フォーラムにお招きいたしました講師の方々をご紹介します。恐れ入りますが、講師の皆様は、お名前をお読みいたしますので、順次壇上の方へご移動くださいますようお願いいたします。

初めに本日のフォーラムのコーディネーターを務めていただきます。藍住中学校教諭のAさんです。(拍手に迎えられ壇上へ移動する。その後もパネリストの名前が読み上げられるたびに拍手がおこり、壇上へと移動を繰り返す)続きまして、パネリストの方々をご紹介します。Bさんです。Cさんです。Dさんです。なお、事前にお配りさせていただきましたチラシに、本日パネリストとして原田彰さんをお招きする予定としておりましたが、都合により欠席となりましたことをご報告させていただきます。

「ひとつと」から「わがこと」へ～自己をみつめ、語り、人と人がつながる人権学習～というテーマでフォーラムを進めさせていただきます。A先生、以後の進行につきましてはよろしく願いいたします。

### 《コーディネーター A》

皆さん、こんにちは。(会場から「こんにちは」元気な声が返る)今、司会者の方から話がありましたが、原田彰先生が体調を崩されまして、本日退院はされましたが、無理はできないということで先生をお迎えできませんでした。

配らせていただいています要項の中に、原田先生原稿がありますので、開いていただければと思います。今回のフォーラムは、(原田先生の書籍を会場に向けてかざしながら)昨年6月に原田先生がまとめられたこちらの書籍、『「差別・被差別を超える人権教育」～同和教育の授業実践記録を読み解く～』がきっかけです。

原田先生は、研究者として、広島大学を最後に退官されましたが、それ以前に、徳島大学、鳴門教育大学におられ、その後、広島大学に移られた先生です。この会場にも徳島大学で、また、鳴門教育大学で、原田先生からご指導を受けた皆さんがたくさん来られて、原田先生とお会いできるのを楽しみにしておられたと思うんですが、今朝も、原田先生からメールをいただきました。「非常に無念である」と綴られていました。

先生のこの冊子にまとめられた思いというのを最初に代弁させていただきます。原田先生が、徳島大学時代に教えられた大学4年生の学生たちに「小学校・中学校・高校時代に受けてきた同和教育についてどう思うか」ということを作文に書いてもらい、その内容を3つ視点にまとめられていますが、大半の学生が、「授業に対し同じことの繰り返しで、またか」という捉え方であったり、「形だけ、うわべだけという授業だった」という捉え方の学生が大半である中で、一部の学生が、「仲間を信頼できる、仲間を尊敬できる、仲間との深い絆ができる関係性を築く同和教育への期待」について綴っていました。

そんな学生の思いや願いに込めていく、信頼と尊敬の絆の中で差別をなくしていける世界が広がっていく、豊かな人間関係をつくる同和教育・人権教育こそが、今の教育現場で最も求められている実践ではないかと

いう問題提起をされています。

原田先生は、この書籍の中に、信頼と尊敬の絆、豊かな関係性をつくる同和教育実践の1つとして、かつて読んでいただいた1990年、1991年の板野中学校での同和问题学習の授業実践の記録と、一部映像もDVDとして残っていますので、鑑賞していただいた同和问题学習の授業について、当時の中学生の言葉を通して、この本にまとめていただきました。

その中に取り上げられたのが、要項の次の頁にある授業の記録です。当時中学生が語った授業が、様々な反響を生み、力を生み、当時の文部省。今の文部科学省が初めて部落問題に関わる資料を全国に発信するという、そういう力をも生んでいきました。

今回、3人のパネリストをお願いしているんですけど、その授業をした1991年度の板野中学校の卒業生です。当時25年前、26年前の実践を振り返って、中学3年生の時の人権学習、同和问题学習が、学年全体で取り組んだ学習が何であったのか、その話をさせていただきます。

最初に、Bさん、書籍の中にはK子として登場します。彼女が「全体学習」という名前のついた、学年全体での語り合いに大きな灯をつけてくれました。それは、形だけの学習・表面的な語り合いに終始していた全体学習を大きく変えていく彼女の語りがありました。

それは、1990年12月13日の授業です。その授業で私自身の人生が変わりました。板野中学校赴任以前にも、同和教育に取り組んできた私の実践があったんですけど、私が私自身のことを丸々語るということはなかったんです。Bさんの語りを受けて、翌日初めて自分自身のこと、自分が部落出身であることを語った授業が生まれました。

今、藍住中学校で勤務しています。30数年前も藍住中学校におりました。当時は、文部省の指定を受けて水平社宣言の授業に取り組んでおりました。その授業で、私のクラスの子どもたちは、いろんな輝きを放ってくれました。

その当時、藍住中学校の私のクラスの生徒たちが、私によくこう言いました。「A先生は何でそんなに同和问题にそんなに必死になるんですか？」こう言われても、当時25歳、26歳の年齢であった私は、自分がその立場であるということ、自分が部落出身であることをクラスの生徒たちによろ言いませんでした。クラスの中にいた1人の地区の生徒には、その思い、部落出身としての思いを伝えているんですが、クラス全員には言えませんでした。「これは大事な教育なんだ！」そういう言い方でしか、生徒たちに伝えることができませんでした。

そんな私に、Bさんの涙の語り、「私たち教師が一番しんどいところに立たなければ、この教育は確かなものにならない」という思いにしてくれました。その思いを教師集団で確認し合いながら、私自身を解放していきました。その時のこと、また、その当時の全体学習のこと、仲間の絆が生きる力になってきたこと、様々な現実を乗り越える力になってきたことなど、Bさんの思いを、今から語っていただきます。

このパネリストとして、この舞台に立っていただくことを彼女にお願いした、その数日後に彼女から発表の原稿が送られてきました。本当に胸が熱くなります。彼女の思い、生きざま、思いを受け止めていただけたらと思います。

(あふれるような笑顔で)涙がいっぱい出るかもわからんけど、(コーディネーターの言葉と笑顔に、Bさんの笑顔がこぼれる)じっくりと語っていただきますので、しっかり受け止めていただけたらと思います。では、マイクをお願いします。Bさんです。拍手をお願いします。(会場に大きな拍手)

## 《パネリスト B》

(立ち上がりお辞儀をした後、席に着き、ゆっくりと原稿を読み進める形で語りが始まる)こんにちは。Bと申します。よろしく願いいたします。

## 部落出身であることを知った中学の時

早速ですが、私は1977年3月8日、徳島県の板野町に生まれました。両親の初めての子どもでもあり、祖母はじめ家族に大切に育ててもらいました。何年か後には、妹と弟もでき、毎日がにぎやかな楽しい家でした。このまま平凡に時間が過ぎていくのが当たり前だと思っていました。

私が小学校に入って間もなくして、学習会(同和対象地区学習会)のお知らせがきました。そして、小学校の授業が終わった放課後に、公民館(隣保館)へと通うようになりました。学校の勉強をしたり、道徳の勉強をしたりして、なんの疑問もなく小学校を卒業するまで通っていました。

中学校へ入学して、1年生の2学期の頃、部落問題についての授業がありました。その授業中に、はじめて知りました。学習会に通っている子は、部落の子であるということを…。私は、目の前が真っ暗になりそうなほどショックでした。

部落問題の授業の時、私はよく「差別はいけない。なくしていかないといけない」と胸を張って発言していました。それなのに、自分が部落出身者であるとわかったら、ショックを受けたのです。そして、ショックを受けた自分にまたショックを受けました。

私は、今まで普通に授業を受けてきたつもりが、実は他人事のように思っていたのではないかと思いました。差別をしていないと思っていたけれど、心のどこかで自分には関係ないと思っていたのかと思うと、自分も差別者だったんだと気づきました。それからは、部落問題の授業が嫌で嫌でたまりませんでした。後ろ指を指されているようで、笑われているような感じがして、気が気ではありませんでした。

## 嫌で嫌でたまらなかつた部落問題学習から変わっていった私の心

中学2年生になった頃、A先生という先生が赴任して来られました。その先生は、部落問題にとっても熱心な先生でした。その先生が言い出したのです。「部落問題の授業を学級だけではなく、学年全体でやっという」と…。

それは、体育館に机と椅子を持ち出して、1クラスが部落問題の授業をする。その周りに他のクラスが座って、1時間はその授業を観ていて、2時間目に全体で意見を述べ合うというもので、全体学習と呼ばれるものでした。学級での部落問題の授業が嫌でたまらないのに、体育館での1学年が集まった全体学習となると逃げだしたいくらい嫌でたまりませんでした。けれども、同時に同級生の考えていることが、直(じか)にわかるということは私の心を変えていくものになりました。

同級生の発言は、心強いものや、グサッとくるものもありましたが、みんな一生懸命に考え、悩み、そして、発言していくという形ができてきました。

そんな全体学習が積み上げられていた、第4回目の全体学習の時、「私の目をみて!」という資料を勉強しました。その主人公は、職場で出会った同僚に、自分は部落の人間であるということを打ち明けます。私は、一生自分のことを隠していこうと心のどこかで思っていました。けれども、部落問題を学習していくうちに、それではだめだと思いました。真正面からぶつかっていかないと、この問題は解決していかないと思いました。

## 発表しようと立ち上がった瞬間に襲われた なんともいえない感情…

私は、自分が部落出身であること、そして、自分も差別の心があったけれど、今はその心と向き合い、差別心をなくしていきたいと思っているということを、同級生の前で発表しようと思ひ挙手しました。そして、(A先生に)当てられ、席を立てて発表しようと思った時です。瞬間に何ともいえない感情に襲われてしまいました。

その感情とは、真っ暗な闇を感じ、未来に対する希望が失われていく感じと、今は中学生という立場で、先生たちに守られている安心感がなくなる感じと、中学を卒業したら、どれだけの同級生たちが背を向けて

いくのだろうという不安感です。そして、妹弟たちに同じ思いをさせたくないという気持ちです。

14歳の私には、この感情をどう整理していけばいいのかわかりませんでした。授業を重ねていたにも関わらず…。恥ずかしい限りです。涙しか出ず、言葉には結局ならなかったと思います。その授業の後、私の席の周りに友だちが集まってくれました。一緒に部落問題の学習を頑張っていこう、みんなで。力をあわせて…。と確認し合いました。

その後、全体学習を重ねていくうちに、友だちの考えていることや思っていることをたくさん聞くことができました。学年全体に絆のようなものが生まれてきたと思います。そして、授業を重ねるにつれ、中学3年生になった頃には、段々と涙も流さなくなってきたように思います。それは、部落問題を真剣に語り合える仲間、そして、先生方がいるという信頼関係が築けたからだだと思います。後に、この仲間たちとの信頼関係が私を救ってくれることになります。

### **部落問題を肌で感じた日**

そして、部落問題を肌で感じる日がやってきました。私が中学生の頃、友だちの家に遊びに行った時のことです。玄関で友だちを待っていたら、廊下の向こうで友だちと友だちのおばあちゃんが話している言葉が聞こえてきました。

「Bちゃんは部落の子やからあんまり遊んだらあかんよ。」

「そんなんわかつとうけん。」と友だち。

私は一瞬うろたえましたが、聞かなかつたふりをしました。その後も何事もなかったように遊んでいたけれど、心にポカーンと穴が空いた感じがしていたのを思い出します。

私が高校生の進路で大学進学を希望した時、大阪の大学(県外の大学)を選んだのは板野の部落から脱出したかったからです。都会の大阪の大学に通ったら、部落差別から抜け出せるのではないかと考えていました。中学生の頃にあんなにたくさん全体学習をして、部落問題について勉強してきたのに、部落差別から逃げ出したい思いが私の中にはありました。

### **部落差別から逃げ出したいと行った大阪で…**

でも、大阪でも部落差別はありました。クリーニング屋さんでアルバイトをしていた時、パートのおばさんが「あのあたりは部落やから近づかんほうがいいで。」「スーパーに行くならこっちのスーパーにしときや。あっちはやめときや。あそこのところやからな。」と言いました。私は平静を装っていたけれど、内心ドキドキしていました。「そうなんですか。」必死で振り絞った一言でした。

また、ある時は、大学の友だちと会話している時に、友だちが、「地方から出てきて、マンション借りる時、不動産屋さんに『うちは部落と違うから安心してください』って母親が言ってたわ…」と言って、ケラケラお腹を抱えて笑っていました。また私は、「へえー」の一言しか言えませんでした。

大学を卒業後、横浜の会社に入社した時、社長、私の部署にやってきて、急に、「みんなの身辺調査をしようと思うのだが、どうだろうか？」と私の直属の上司に相談しました。私は、顔は平静を装っていたけれど、髪の毛で隠れていた耳は真っ赤になり、背中からはタラーッと流れ落ちるものを感じながら、パソコンを打ってた手が、かすかに震えるのを必死で押さえていました。しばらくして、腹が立ってきました。社長に、そして、自分に…。

私は、何にも悪いことしてないのだから、引け目を感じることはない。堂々としていよう。これで何か言われたら、こっちからこんな会社、辞めてやるって思いました。

今、振り返ると、私は完全に忘れていたことがありました。それは、「対話」です。今まで逃げてばかりでした。部落問題について、自分が勉強してきたことを相手に聞いてもらおうとする行動が全くなかったのです。いつもその場をなんとなくやり過ごすことしかできませんでした。結局、社長は調査をしたのかはわ

かりません。私は、仲のよい同僚たちにも、自分が部落出身であることを打ち明けることはできませんでした。

### **結婚差別を乗り越えて…心のそこから思えた「この人についていこう」という思い**

そして、25歳の時、3年付き合っていた彼氏と結婚する約束をしました。彼氏は同じ徳島県の板野町の人です。でも彼は、部落ではない人でした。すぐに彼の母親から電話がかかってきました。内容は、私が部落の間人であるから結婚は賛成できないというものでした。私は、「きたか…」と思いました。これが結婚差別なんだと…。

ここでも私は、「対話」を避けようとしてしまいました。「いいよ。別に。他にいい人を探したら？」精一杯の強がりでした。しかし、彼氏は強かった。「そんな関係ない。同じ人間や。親が間違っている」と言ってくれました。本当に心強かった。本当に、この人についていこうと、心の底から思いました。彼氏は何週間もかけて両親を説得し、結婚に賛成してくれるまでになりました。そして、今では義理の両親も優しく、本当の娘のように思っていると言ってくれています。

今まで出会った人たちには、とても感謝しています。いい人もたくさんいたし、私にとってそうじゃない人もいたけれど、どの人も尊敬するところがいっぱいあって、教わるところがたくさんありました。今まで私を支えてくれる人もたくさんいました。そして、私も人を支えられるように気にかけてきました。でも思います。私は逃げてばかりいたのかなと…。もっと真正面から捉えていたら、何かが変わったかもしれないと思う時もあります。

中学生の頃の全体学習のおかげで、今日の私があります。この全体学習がなかったら、私は今頃、就職も結婚も諦めていたと思います。自分を強くしてくれたのは、何度も何度も意見をぶつけ合って討論してきた仲間と、ずっと見守っていただいた先生方です。卒業してからも、全体学習に費やした時間、仲間、先生方はずっと私の宝物です。差別に直面することは度々ありましたが、全体学習を体験してきたおかげで、私はなんとか今日に至ります。一人で直面するのはとても怖かったです。今でも怖いですが。でも全体学習のおかげで相談できる仲間ができ、1人じゃないんだと幾度、心強く感じたことがあったか知れません。本当に感謝しています。全体学習という機会をたくさん設けていただいて…。

あれほど嫌でたまらなかつた全体学習の時間が、今や私の人生になくてはならない時間になっていたとは…。卒業して社会に出てから、本当に大切な時間だったなあと思います。

そして、私みたいに弱い人間でも、全体学習によっていつのまにか強くなれていたように、たくさんの人たちが、差別に向き合える力、乗り越えられる力を、部落問題学習を通じて培っていければいいなあと思います。

### **甥っ子の言葉と「最近の教育」…**

最後に、先日、こんなことがありました。徳島に帰省した時に6歳になる甥っ子に聞かれました。

「Bちゃんのふるさとはどこ？」って…。

私は「ここよ。ここのお家がふるさとよ。」と答えました。

私が「あなたのふるさとはどこかな？」と聞いてみました。すると甥っ子は「お母さんのお腹の中…」と答えました。私はなんてかわいらしいことを言うのだろうと思い、このことを、その場にはいなかった甥っ子の父親である私の弟に話しました。

(思いが溢れ、力強く読む原稿の速度が段々と早くなりながら)そうすると、私が想像していた答えとはかけ離れた言葉が返ってきました。「最近の教育や。」と…。私はショックでした。「ふるさとも言えないの？」と思いました。よくはわからないけど、部落問題が水面下に沈んでいきそうな思いになりました。

(きっぱりと)そうならないためにも、部落問題が学校だけの授業で終わらず、生涯学習として取り組んで

いかなければいけないとつくづく思いました。私は甥っ子のためにも、目をそらさず生涯勉強していきたいと思えます。差別に負けない、そして、自分も差別することがないように、今までも。これからも。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

### 《コーディネーター A》

(Bさんの思いをしっかりと受け、ゆっくりと一言一言をかみしめるように)今の発表原稿を、私は5月に受け取りました。

冒頭の言葉の、中学時代に友だちの家に行き、玄関先で友だちを待っていた時、友だちのおばあちゃんは、彼女が玄関先にいることに全く気づいていません。そんな状況で、おばあちゃんが友だちに言った言葉、「Bちゃんは部落の子やからあんまり遊んだらあかんよ。」その言葉に対して、彼女が玄関先で待っていることに全く気づいていない友だちは、「おばあちゃん、わかっとなるけんな。」

(一言一言に精一杯の思いを込めて)そんな体験が部落の子どもたちを卑屈にしていきます。

私が中学2年の時に、友だちの言葉で自分が同和地区に住んでいるということを知りました。その時に、小学校の時のこと、中学に入ってからのこと、いろんなことがよみがえってきました。「ああ、そうだったのか」と思いました。

部落差別の現実というのは本当に切ないです。しかし、その現実を噛みしめ、おかしいことがおかしいと言える関係ができた時に、あれだけ卑屈だった自分の思いが、変わっていく。人間ってやっぱり、強くなっていけるんだと思えます。それはやっぱり、この教育の可能性であり、よろこびだと思えます。『「差別・被差別を超える人権教育」～同和教育の授業実践記録を読み解く～』の中で、原田先生はこう書いてくださいました。「地区の子も地区外の子も、共にその思いを語っていく。そして、共に超える。」

そんな教育が1990年と1991年に展開されていきました。その中心にいた仲間が、パネリストという形で集ってくれました。当時の板野中学校3年B組の授業がこの本の中心になっています。

そのクラスのリーダーとして、その思いをずっと語り続けてきたC君に、この教育に対する思い、また、今日集まっていたいただいている皆さんに伝えたいメッセージ、それをこれから語ってもらいたいと思えます。中学生時代から、彼の語る言葉というのは、ずっと心に響いてきました。

道徳の全国大会で同和問題を取り上げようとした時、「これは道徳の全国大会だから、資料に同和問題を取り上げるのは避けてほしい」と言われ、「同和問題は西日本の問題である。あなたの場合は大会のメインとしての、道徳の『特別公開授業』という特別な授業なんだ。そこで同和問題を取り上げるのは、道徳教育の研究会としては問題がある」という意見があったんです。

そういう先生方の心を解きほぐし、その心に思いを染み込ませるように、彼は語ってくれました。その公開授業の中で、彼は大会主題を指さし、「前を見ると、『人間の生き方を考える道徳教育』と書いてあります。僕たちは板野中学校で同和問題を通して人間の生き方を考えてきた。」そう語り、同和教育と道徳教育のつながりをしっかりと伝えていく。それに仲間が返していく。そんな授業をつくってくれた中心の生徒です。

それでは彼自身の取り組んできた思い、揺れてきた思いをこれから話をしてもらいます。(ニコニコと)C君、どうぞお願いします。皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

### 《パネリスト C》

皆さん、こんにちは。(会場から「こんにちは」)今、紹介して頂いて、すごく緊張しています。今日は、僕が体験したことや、それから今思うことを皆さんに問いかけながら話を進めていきたいと思えます。

皆さんの前でお話することになるのですが、僕は、子どももいますし、妻もいます。残業で帰りが遅かったり、妻の機嫌が悪い時に、「パパ」から「おっさん」という呼び方になります。(照れくさそうに)ここは、スッと笑っていただくところなんです…。(会場に笑いがこぼれる)こういった感じで、自分の緊

張をほぐしながら、そして、皆さんの緊張をほぐしていただきながら、僕の話聞いていただけたらと思います。いろいろな問いかけを3つくらいいたしますので、皆さんが自分のこととして考えながら聞いていただけたらと思います。座って話をさせていただきます。

### **結婚の時、乗り越えなければならなかった壁**

僕には、小さい子どもが3人いますが、結婚する際、乗り越えなければいけない壁がありました。それは、結婚差別です。僕が被差別部落出身で、彼女は地区外の人でした。それから、彼女の家は、被差別部落の人とは絶対結婚させないというものでした。彼女の家の方では、彼女が小学校の時に亡くなったお父さんの遺言とか(に現れていたように、「被差別部落の人とは絶対結婚させない」と言われているような家でした。

ここで皆さんに問いかけをしたいと思いますので、ゆっくりと目をつむっていただけたらと思います。これからゆっくりお話していきますので、目をつむって聞きながら、そして想像してください。

今、あなたと真剣につき合っている人と、2人っきりで部屋でいます。結婚も意識をしています。その人からこう言われます。「あなたは、あっちの人？被差別部落の人？」って聞かれます。その時、あなたはどのように答えますか？どんな気持ちになりますか？なぜつき合っている彼、彼女がそんなことを言ったと思いますか。(少しそのまま待ち)はい、ありがとうございます。それでは、ゆっくり目をあけてください。

僕自身、彼女にそう言われました。僕は、その時、「そうだよ」って答えました。当時の彼女の質問と、そして、僕がそう答えた時の彼女の気持ちというのはよくわかりません。ただ、目の前の彼女はすごくショックを受けていました。

でも、その後、彼女は、彼女のお母さんとよく話をしていますし、相談もしています。また、妹、弟(きょうだい)もいますので、その方たちともよく話をしています。そして、特に差別意識の強かったおじいちゃんにも、当然話をしています。また、彼女の話のしやすい親戚の人にも、いろいろ話をしたり、相談を当時はしていました。

### **結婚差別…冷たい態度に変わっていたおじいちゃんの変容**

当時、僕は、彼女のお母さん(義母)には、いろいろとお世話になっていましたし、面識もありましたが、やはり、おつきあいをして、僕が被差別部落出身であるということを彼女に打ち明ける前と打ち明けた後とでは、明らかに態度が変わったように感じました。おじいちゃんにいたっては、あんなに僕の妻、おじいちゃんにとっては孫にあたるんですが、すごく可愛がっていたにも関わらず、そのことが分かった段階で急に冷たい態度に変わった状態でした。明らかに、おじいちゃんにとって自分の何人かの孫の内でも、妻にだけ急に態度が変わりました。

その状況の中にあって、彼女もいろいろまいていましたが、僕も、あきらめるつもりはなくて、彼女も一生懸命にお母さんと話をしていました。それから、おじいちゃんの畑仕事へ車で彼女に連れられて何度か行っています。おじいちゃんの畑では彼女と一緒に雑草(くさ)を抜いたり、お手伝いに何度か行っていました。

何度目だったかわからないんですけども、畑仕事を手伝っていた時に、今ぐらいの暑い時期だったと思います。木陰で僕と妻が休んでいると、麦わら帽子をかぶったおじいちゃんが手を出してくれて、2本ジュースを手渡してくれました。僕と彼女の分です。そのことが僕自身うれしく感じて、おじいちゃんの手がとても大きく見えたのを、今でもよく覚えています。

では、なぜ、僕があきらめず前に進んでいったのかということを考えてみると、1つは、当時中学校の時の担任だったA先生に相談したこと。2つ目は、先ほどお隣のBさんの方からも話のありました、中学時代の部落差別と向き合う部落問題学習を中心とした全体学習を通して、差別と向き合う授業を体験した結果、頑張ってきたのかなと思っています。

1つ目のA先生の相談というのは、先生は笑顔で出迎えてくださり、話を聞いていただいて、アドバイスをいただいたからかなと思っています。

一番大きかったのは、中学3年で部落差別と向き合う授業によって、自分にとって、部落問題が「ひとごと」から「わがこと」へと、この表題にあるように変わっていきました。この、当時の板野中学校の全体学習では、部落差別への怒りと、部落問題をクラスみんなで乗り越えようとすることを学んだように思います。

### **家庭訪問で初めて聞かされた「部落出身」であること**

全体学習は先ほどBさんの方から説明がありましたが、この全体学習は、中学2年から始まりました。1クラスが真ん中で発表したことを、他のクラスは周りで観ている。その周りで観ていた生徒らが、次の時間には発表して意見を交わし合うというものです。

当時の僕は、そんなに目立った生徒ではなくて、発表もそんなにしていませんでした。感想文には、「差別はいけない」「自分が嫌なことをしてはいけない」って書いて、そういうふうに思っていました。

それがどうして自分のことに変わったかという、中学3年、4月の家庭訪問で、A先生が来まして、母親と2人でA先生の家庭訪問のお話を聞いていた時で、A先生がいろいろと、部落差別のこととか、授業のこととか、学校のこととか話してくれた後で、「おまえも部落の人間ぞ」って言われました。僕は、その時にその話を聞いて「ええ？」っていう思いになりました。僕は知らなかったわけです。母親に聞こうと横を見たんですけど、もう、母親は涙を浮かべていて、何も聞ける状態ではなかったんです。僕は、自分の思いをどういうふうに誰に聞いていいかわからず、もう一度先生の顔を見てという形なんですけど、ただただショックでした。自分の家族にもそんな話を聞いていないのに、急に来られた先生からそんなことを言われて、「なんなんだこれは…」と思いました。

今まで、自分の授業とかで「差別はいけない」とかいろいろ言ってきたんですが、ただただショックだったのが、なぜショックだったんだろうと考えました。本当にただただショックで何も言えないような状態になっていました。時間が経っていくとですね、自分が今まで漠然とおかしいなと思っていたこと、周りと違うなって思っていたことが、先生から聞いたことによって周りが見えてきてわかったように思います。

わかりました。わかってきて、「それってやっぱりおかしい！」と、そういうように思うようになりました。自分や母や家族を苦しめる、この差別に対して怒りがこみあがってくるようになりました。

当時、僕も鈍感だったということもあると思うんですが、自分がそうであるということを中学3年生まで知らずに過ごしてきていました。全体学習では、同じ学年の子たちは、自分が被差別部落出身だということを打ち明けて、いろいろ悩んでいる時だったと思うんですが、自分がそうだとわかっていなかったのも、その辺(あたり)が鈍感だったかなと思います。

全体学習の発表の中では、先ほどのBさんの話にもありましたが、ある子の発表には「親からあっちにはいったらいかん…」と言われたとか、「あの子は被差別部落の子だから…」とか、おばあちゃんに「その子はどこの子じゃ…」と聞かれる。そういった差別発言というのが、身の回りにあるというのがわかりました。発表の時にもいろんな周りの友だちからそういう発言が出てきました。周りには、おかしい差別というのがあるんだなと、そういうのがわかる全体学習だったかなと思います。

### **同和問題学習…言いかけて言葉にならず泣き崩れた同級生**

すみません。話が飛び飛びになっているかもしれないんですけど、ここでもう1つ皆さんに問いかけをしたいと思います。すみませんが、またゆっくりと目をつむっていただけますか。今度はこの全体学習というのをイメージしてもらおうと思いますので、ゆっくりと目をつむっててください。

今、皆さんは中学3年生、年齢でいえば15歳くらいだとします。また、ここは道德の、または同和教育の



授業中です。前に黒板が見えます。黒板の前に先生が立っています。グルッと右から後ろ、そして、左を見ると、30人くらいの生徒がいらっしゃいます。生徒みんなが先生の目を見て話を聞いています。道徳教育・同和教育ですので、同和問題について話をしています。そういった授業の風景です。

その授業の中で、クラスの女の子が発表します。「私、秘密にしておきたかったんだけど、みんなを信じて言います。私、部落出身なんよ。」って…、そう言って、その子は、両手で顔をおおって、泣き崩れました。すると、先生がこう言いました。「彼女が苦しい胸の内をみんなにさらけだしました。それをつないでください。」って…。

すぐに、ある女の子が次の発言をしました。「私は、彼女の友だちで、さっき、部落出身なんよって打ち明けてくれた。友だちが、部落でも今までと変わらんと友だちやけんって言いました。それから、友だちを苦しめる差別は許せん。たよりないけど、これからも友だちの支えとなっていきたいです。」って、そう答えます。これは、ある授業での僕の記憶です。

もう1回、ゆっくり言いますので、そのまま目を閉じたまま聞いてください。

同和教育の中で、クラスの女の子が発表します。「みんなを信じて発表するんやけど、私、部落出身なんよ。」彼女はそう言って泣き崩れました。先生がこう言いました。「(本心を語ってくれた仲間の思いに)つないでいって…。」

そしたら、彼女の友だちが発表しました。「さっき授業が始まる前に、友だちが、私、部落出身なんよと打ち明けてくれました。それで私は、友だちが部落出身でも変わらず、その時、友だちやけんと言いました。それから、差別は許せんと思うようになって…。頼りないけど、これからも友だちの支えになっていきたいです。」そう言いました。

今度3回目になるんですけど、今度は自分のこととか自分の子どもに置き換えて、ちょっと聞いてみてください。

クラスの友だちが発表します。「私、秘密にしておきたかったんやけど、みんなを信じて言います、本当は辛いことなので言いたくなかったんやけど…」そのことを伝えて泣き崩れました。先生がこう言います。「彼女の思いをつないで」と…。

すると彼女の友だちは、「さっき授業の前に辛い気持ちを打ち明けてくれた。友だちがそんな辛いことを思っているって知らなかったんやけど、そんな友だちを苦しめることは許せん。私だけでは頼りないけど、これからも支えになっていきたいです。」これは、25年前の僕が記憶している中学校の授業の一場面です。ありがとうございました。ゆっくりと目を開けてください。

この頃には、担任の先生も、他のクラスの先生方も、先生自身の心の中にある矛盾や差別の心と向き合っていますし、その向き合った気持ちを生徒にぶつけ、また、さらにそれを聞いた生徒も純粋な気持ちで友だちや先生にぶつけていたように思います。

### **子どもの大きくなった時までに変えていきたい社会**

今、こういった自分の中にある矛盾を見つめ、自分の中にある差別心や現実として厳しい差別がある社会に怒り、憤りを感じて、そして、それを支え合う仲間と共に手を取り合う、または、乗り越えようとする授業や教育があるのかどうかわかりませんが、僕の子どもには、そういった授業を体験させてやりたいなあというふうに思っています。

自分の子どもが大きくなって、物事がわかるようになってきた頃、それから、結婚を考える年頃になってきた時には、おかしいことがおかしいと言える、それに味方してくれる人が増えているような社会にしていきたいと思っています。

それでは、最後になるんですが、問いかけをしたいと思いますので、すみませんが、もう一度目をつむっていただけたらと思います。これで最後の問いかけになります。

皆さんの子ども、または、お孫さんが10年20年経って、20代、30代になりました。今日は、お子さんやお孫さんが恋人を連れてあいさつに来てくれる日です。相手の方は、被差別部落出身ということ、自分の子どもや孫から聞いています。

2人があいさつに来てくれました。自分の子どもや孫が、にこやかに次の言葉を言いました。

「私、この人と結婚します。賛成してくれる？」そうあなたに聞きました。その時、どんな言葉を2人にかけますでしょうか。(少し間を置き)はい、ありがとうございます。それでは、ゆっくりと目を開けてください。時間がきましたので、僕のお話を終わりにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(しみじみと思いを込めて)中学時代の彼の語りそのものです。中学2年の時から同和問題に対して積極的に発言をする生徒でした。その発言を聞く度にやっぱり思うんです。この子は自分の立場を知らん。その立場を知った時にどう向き合っていくんだろうかと思うんです。まずはやっぱり、自覚するところからしか始まっていかん、そういう思いの中で、ずっと子どもたちとつき合ってきました。

2年の時だけではないです。やっぱり、生涯にわたって部落問題を語り合える関係でありたいし、一番しんどい時に顔が浮かぶ存在でありたいし、共にその問題を乗り越えていくつながりでありたい。それがやっぱりこの仕事をしている私の思いであり願いです。

ゆっくり彼が語ってくれた授業の場面、それは、中学3年の板野郡同和教育研究会の公開授業の一場面です。繰り返し繰り返し、地区の子が自分の立場を語ります。地区外の子がその仲間に思いを返します。それが延々と続きました。

その発言の後半、その語り合いを聞いた彼はこう語りました。クラスのみんなをじっと見つめて、こう言いました。

「僕も部落の人間です。今までそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていた。」

仲間が語る、地区の仲間が語る、地区外の仲間が語る言葉に揺さぶられて、彼は語り出したんですね。

「みんなの発表を聞いて、みんないいなあって思いました。それで、A先生に、家庭訪問の時にお前は部落の人間だと言われ、その時に、自分には差別心はないって思っていたけど、実際にはありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど、泣いてしまいました。これからはこれをバネにして、部落解放の道を進んで行って、『気軽に部落の人間だと語れるような社会』を目指していきたいです。」

彼の語り、教室に響き渡りました。次から次へ思いが語られていきました。この授業から同和教育の質が変わっていきました。まさに、生徒が生徒を変える授業になっていきました。この後、このクラスの委員長であった、今は名前がロビンソンと変わっていますが、(Dさんを確認するかのように見つめ、Dさんも応えるようにうなずく)旧姓・Iさんですが、この授業(板野郡同和教育研究会公開授業)の最後に、彼女に締めくくってもらったんです。

その場面は昨日の事のようによみがえります。この授業は、「ふるさと」の詩を書いた丸岡忠雄さん、部落に生まれたことを堂々と語る、そんな詩を書いた丸岡さんの生きざま、丸岡さんの生き方に学ぶ授業だったんですね。私は、(生徒たちの)丸岡さんの生き方に学ぶ発言が繰り返されて行って、私は、委員長である彼女にこう託したんです。

「時間が来ました。最後、委員長まとめてくれますか。丸岡さんのことを学んできて、丸岡さんとはみんなにとって何であるのか。丸岡さんの生きざま、生き方を学習してきたことは何であったのか？」と問いかけたんです。

(Dさんの方に身を乗り出すようにして)なんて言ったんですかね。(壇上で顔を見合わせながら交わされる笑顔の中で、コーディネーターが雰囲気を楽しむようにあふれる笑顔で)記録が残っています。この原田

先生の著書の中にこう書かれています。

私は、丸岡さんのことを話してくれると思ったんですが、彼女はこう語ったんです。

「先生にとってとか、みんなにとって丸岡さんとはすごい人かもしれないけど、私にとって丸岡さんとはただのおじさんです。」

この発言を聞いて、私は転けそうになりました。彼女は丸岡忠雄さんを「ただのおじさんです」と言いました。私は、何を言い出すんだろうと思いました。

みんなが泣きながら思いを語った授業のまとめですよ。その最後に、みんなが思いを込めて語った丸岡さんについて、「ただのおじさんです」と言うんです。

そして、次です。「私の丸岡さんはみんなであり、先生であり、みんなの丸岡さんはみんなであり、先生あり。みんなが悲しむことで私も悲しくなり、みんなが頑張ることにより私も頑張らなければと思う。私の一番中心はみんなです。この勉強をするにあたって、絶対にみんなを泣かせたくないと思います。みんなが笑ってちゃんとやっつけていけるようになるまで、ほんまにみんなで頑張っていかなあかんと思うんです。みんな、頑張りましょう。」

共感と連帯の絆の中で、生きる力というのは沸いてきます。関係です。差別・被差別を超える関係です。そういう深い深い絆をつくっていく。そのことを終始語ってきた彼女です。彼や彼女たちとの出会いが私の人生を変えていくんですけど、本当に強烈な言葉を残してくれたDさんに、今から話をしてもらいます。25年、26年経っても、その思いはずっと彼女の中にあっただろうし、またよみがえってきただろうし、そんな思いを話してくれますか？(大きくうなずくDさんを迎えるように拍手がおこる)

## 《パネリスト D》

こんにちはDです。旧姓はIです。なんか、先生がごっつい紹介してくれるけん、緊張してしまうんですけども、ちょっと座らせてください。今日の会は、学校の先生方がほとんどだと思っていたので、制服を着た中学生？(会場に確かめながら)中学生がいらっしゃって、どんな思いで参加しているのかなあなんて、前から思って見させてもらっていました。また、後からお話を聞かせてもらえたらいいなと思っています。

### 今の私

まず初めに、A先生から今回のお話をいただいた時、実は、すごく私のことを評価してくれるんですけど、こういうふうに、私が皆さんの前でお話するなんておこがましいと思いました。今の私が、人権教育を語るということは、正直後ろめたく感じています。

先生にとっては、中学の時に感じられた私への思いしかないと思うんですが、その時には、差別がなくなると思って、みんなでその日まで頑張ろうと中心になって言ってた自分、仲間との絆を大切にしようという思いがあって、それはその時には嘘ではないんです。その時にはほんまに思ってたんですけど、今の私にその思いがあるかと言ったら、正直、そこまで燃えてないし、こうやって話をいただけるまで忘れていたところもあると思います。

(少し困ったように)だから、中学時代の自分が言ってたことがきれいごとだと思えて、その中学校の時の自分を否定するというか、あの時の私は何だったんだろうなみたいな、情けなく、そして責められてるふうになんて思っています。

でも、別の先生(板野中学校で全体学習に取り組んできた吉成正士先生)と当時の学習について振り返りをさせてもらっていて、意見を交換している時に、私が感じているような後ろめたさ、その、「差別と一緒に闘っていこう」とか、「仲間との絆はずっと大切にしていきます」と言っていたことが遠のいている後ろめたさというのは、多くの人が感じてることだよと言われて、救われた気分になりました。ならばこういうふうになってしまったという自分も現実であり、皆さんに問題提起ではないですけども、こんな現実もあります

というのもそれでもいいのかなと思います、今回参加させていただきました。

なので、皆さんが心の中で、燃えてない自分というか、情ない私を見せるので、どうなのと思う人もおるかと思うんですけど、中学の時の人権問題、全体学習で学んだことっていうのは、1つのきれいな答えじゃなくて、自分をさらけ出すことが一番やということなんです。なので、その気持ちで今日のぞんでいます。今日、皆さんに私もいろいろ教えていただきたいなと思ってここに来ています。よろしくお願いします。

### 中学3年の頃の私

当時の思いを振り返ってみたいと思います。(生き生きと)もともと私はけっこう目立つのが好きで、自分で言うのもおかしいんですけど、生徒会にも立候補するような優等生タイプだったと思います。なので、全体学習が始まった当初は、多分(ここにいる)みんなも一緒だと思うんですけど、きれいごとを言って、きれいごとって、先生が求めているであろう答え、当たり障りのない答えというのを発言して、それで終わっていたと思います。

部落問題というのを意識してはなかったように思います。けど、部落問題を知らなかったわけじゃなくて、何だか気をつけなあかん地域があるとか、なんとなく危ないというか、家庭で言われているようなことがあったんですけど、それをスッと受け入れてたところがありました。

さっきBさんが言ったんですけど、おばあさんが「あの子は地区の子やで」というところは、多分うちの家でもありました。だから(Bさんをチラッと見ながら)Bさんが言っていたのを聞いて、「うちの家のことかなあ、聞いてみたいけど、ちょっと聞けんああ…」みたいな思いもあります。

どこから自分の部落問題とか全体学習に対する思いが変わって来たかなと思ったら、やっぱり、Bさんが自分のこととして、泣きながら、ちゃんとした答えではないんですけど、でも、ワッと、自分の思いを本気でみんなの前で振り絞っている姿を見た時、無茶苦茶悪いことをしよった友だちが、先生を通してなんやけど、私に自分が部落出身ということ伝えたいということ言われたんです。

その時に、「ああ、教科書の問題と違うなあ」と…、「ああ、自分の友だちが本当に苦しんでいるだ…」みたいなことがあったので、きれいごとを言うことで、その子を傷つけるとか、ちゃんと真剣に取り組まななら、これはほんまに人を傷つけるんやというところに、「わがこと」として落とし込めるようになった時から、みんな多分真剣になっていったと思います。

そうなった時に、Bちゃんとかも言ってたことなんですけど、自分の出身とかに将来の不安とかもあったりすると思うんですけど、私の場合は、親だったりとか、家族の中で受け継がれていく差別心みたいなものをさらけ出すところが、私の中の「わがこと」にすることやっと思ったと思っています。

やっぱり、人前で「私の家族は差別してます。その考えを聞いて私も差別しています。」みたいなことを言うのは恥ずかしいところはあると思うし、その言葉で傷ついている友だちも多分あったと思うんですけど、でも、きれいごとを言っていたら、結局は今までの学習と一緒に変わらないし、何も生まれなかったと思うんです。差別をなくすためにと言っていたけど、結局は、自分自身の差別心と向き合うことで、自分自身のための勉強にもなったと今では思っています。

(言葉を探し出すように、何度も表情豊かに上を見るようなしぐさを繰り返しながら)…それで…、差別に対する怒りっていうのはすごいあって、中学校の時やから、大人に対する怒りだったりとか、周りに対する怒りで、「きたない！」みたいな思いがすごいあったんです。

けど、今考えてみると、差別をなくすというのは、すごく大きな問題で、(照れくさそうな笑顔で)大人の私が今考えると、どこか現実みを帯びていなかったようなところがあると思うんです。それは部落問題であったりとか、他のいろんな人権、人種問題であったりとか、どっかであきらめているところってあると思うんですけど、私たちがやってきた全体学習の中で、絶対的だったものっていうのは、差別に対する不安とか、苦しんでいる仲間を支えるっていう自分にできる行動を取りました。

誰かが熱い思いを語ってくれたら、それを絶対支えようとする。その子が発言できるように発言をつなげていくとか、その思いっていうのは絶対嘘はなかったと思うんです。その思いを友だちとか、みんなに示すのは何だったのかなという、その差別は間違っている。(自分の思いを一つ一つ確認するかのように何度もうなずきながら)私たちはその差別に対して怒っている。一緒に頑張らなくていいこうっていうふうに訴えていくことだったんじゃないかなあと思っています。

### 板野や仲間と離れて…これから大切にしていきたいこと

だけど、高校、大学、社会人と、地元(板野町)を離れて、仲間との絆はどんどん薄れていって、逃げてるわけではないんですけども、A先生みたいに差別と闘うこともなく、板野の友だちとも疎遠になって、差別はまた他人事となっていきました。(前に書かれているテーマを指さし)こういう「ひとごと」みたいになっていきました。

なので、今回話を聞いて、BさんやC君が現実問題として、結婚差別だったり、そういうのがあったと聞いた時に、本当に、ガガッと熱くなったというか、なんか…私は逃げれる…、逃げてたなみたいな思いで、(明るい表情の中にも、自分の思いを一生懸命整理しようとしながら)申し訳ないなと思いました。そういうのもあったので、今回お話を頂いた時に、申し訳ないというか、おこがましいというか、後ろめたさを感じていました。

そうですね、(何を話そうかと少し迷いながら)私に今何ができるのかなと考えた時に、子どもがいるんですけど、子どもって、親が話すことって、無条件に信じるじゃないですか。どんなことであっても…。

だから、私は、それは子どもにはしていきたくないと思うんです。関東の方(神奈川県鎌倉市)に住んでいるので、こっちで板野に住んでいた時みたいに、被差別部落とか、そういう差別問題というのがそんなに身近にないので、子どもが(そういう問題に)ぶち当たることがあるのかどうかはわからないんですけど、子どもが間違わないようにというか、その時に(表情豊かな中にも、懸命に言葉を探しながら)子どもを導いていける親でありたいし、それをしないと中学校の自分を否定することになるので、そういう意味では、あの学習っていうのは、私の中の核になっているんじゃないかなあと思っています。

でも、やっぱり、実家に帰って車を運転していると、誰から聞いたのかは覚えていないんですけど、「このあたりで事故したら大変やから、気をつけよ！」って言われていた子どもの時の思いというのがどこかにあって、こわばる自分があるんですね。でもその時に、そのこわばっている自分に、「おかしい、おかしい…」って、「それはどこを走っていても危ないのは一緒や。私は間違っただけを植え付けられている。でも、中学校でそれは違ってたって学んだよな。あの時の自分の思いに立ち戻ろうな…」と、自分と対話することができます。

だから、私にとっては、今思うんですけど、先生とか友だちにすごく恵まれていて、私と家族だけの価値観では、子どもを間違っただけに導く可能性があると思うんですけど、先生とか友だちとの出会いで価値観を修正できたっていうのが、とってもありがたく思っています。

今、親になって思うのは、先生方もたくさんいらっしゃると思うんですけど、ここまであんなに熱い思いを持って、子どもと先生がされることができるのかなと、ちょっと疑問に思っています。中学校の時に、道徳という場を借りて、思春期の子どもたち、言うなら先生に対して、すごい偉そうな口をきいていた子どもたちが、友だちとか大人と、腹を割ってぶつかれたっていうのは、本当に大きな財産だったと思っています。

中学を卒業して、自分が親になって、どれだけ恵まれていたのかっていうふうには思います。自分の子でさえちゃんと向き合うのができてないという時があるんですけども、先生方は熱く子どもたちに接してくれました。それは、その時の子どもの私としても感謝やし、親になった私の立場としても、そういう先生に出会って良かったなと思うし、自分の子どもがそういう先生と出逢えることを願っています。

それで、その時には感謝できる親でありたいし、子どもも先生に感謝できる、(ニコニコ)結構、思春期の時って、ある意味、先生に拒否反応をおこすところってあると思うんですが、やっぱりその先生が熱いものを持っているので、感謝できる親子でありたいなと思っています。

(照れくさそうないっぱいの笑顔の中で)なんか変な方向になりましたけど、これが、熱かった自分がこういうふうになったという問題提起です。また皆さんの意見の聞けるのを楽しみにしています。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

まさしく、彼や彼女たちと取り組んできたことは、差別をなくす闘いでした。今回、この著書「差別・被差別を超える人権教育」の中にも一番強く出てきているところで、C君の発言をちょっと紹介しましたが、1991年に開催された第25回全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会というのが、本当に大きなものを遺してくれました。その中で部落問題を語っていく3年B組っていうクラスなんですけど、その3年B組の授業が多くの人を揺さぶり、それをきっかけとして、私が半年ほど文部省(現：文部科学省)に通うようになりました。

でも、そういう授業を観た先生方の中に、「じゃあ、同じように頑張ろう」という先生もたくさんおられたと思うんですが、「こんな授業はできない。何であんな授業になるのか。あの人は特別だ。あの人は部落の人だからあんな授業ができるんだ。」とサラッとと言われる先生もいたんです。

ただそれだけのことです。でも、それだけのことが、そういう言葉を聞いた部落出身の先生というのは切ないんです。そういう授業をした部落出身の私をもっと切ないんです。(笑顔いっぴいで壇上のパネリストを示しながら)私は、この子らをやっぱり愛おしいと思っているし、この子らとずっと歩いていこうと思っていますから、そういうことを言われた事実もこの子らに伝えるんです。

本当に、部落差別をなくしていく教育が当たり前になっていく。それを本当にみんながよろこびとして実践していく。そういう営みをつくるために公開授業をしてきたいし、これからも授業をしていくし、そういう絆をつくっていくかかということが、『差別・被差別を超える人権教育』～同和教育の授業実践記録を読み解く～』というこの1冊の本にまとまるんです。25年前のことです。25年前のことが昨日のことによみがえる。そういう素敵な世界だったんです。

中学生の言葉が、必死に語る言葉が、ずっと残っていくんです。やっぱり、当事者と当事者でないのでは全く違います。(力を込めて)結婚差別に直面するのは、本当に苦しいです！悔しいです！一番大事な相手から差別を受けるといのは、本当に切ないです。これからずっと関わっていかねければならない、これから付き合っていかなければならない、大事な関係をつくっていかねければならない相手から差別を受けるといことは、本当に苦しいです。

(じっくりと)でも、それを乗り越えていく力が生まれていく。それが、この教育だと思うんです。でも、そういう立場でなかったら、離れたら忘れるんです。でも、こうして出会い、語り合ったらよみがえるんです。これがこの教育の可能性だと思うんです。

本気で語ったことは、やっぱりよみがえるんです。25年経っても…。そして、それがまた生きる力になるんです。そんな、一人一人のよろこびとなっていく人権の学びが広がっていったらと思います。

それは、やっぱり自分の言葉です。自分が精一杯伝えていった、それに返してくれた、その絆です。授業を重ねていく度に発表する子が増えていく。今まで、絶対発表しないと思っていた子が手を挙げるんです。マイクを握って語ってくれるんです。それがうれしくてたまらないんです。その発言を聞いただけで体が熱くなるんです。

そういう深い深い絆をつくっていく。そういう人権教育が当たり前のように展開されていく。教師にとっても、子どもたちにとっても、その家族にとってもよろこびとなっていく。そんな学びが広がっていくよう

に頑張りたいと思います。10分間休憩を取ります。

## 前半終了

### =意見交換=

#### 《コーディネーター A》

(一言一言に思いを込めてゆっくりと)この3人のパネリストたちと、部落問題学習をずっと積み上げてきました。部落問題学習を積み上げていく中で、授業の度に語る生徒が増えていきます。友だちの言葉がよるこびになります。友だちが成長する姿、友だちが良くなる姿、それが一番の教材になります。それが次の授業につながっていきます。

いろんな資料があったわけですけど、そのクラスの人間関係が資料になります。みんなの存在が資料になります。みんなの言葉が、みんなの生活が、みんなの思いが、生きる力になっていくんです。

10年余り、私はこのフォーラムに関わらせていただいています。まさに、このフォーラムがそうなんです。中学生が語る、高校生が語る、大学生が語る、様々な年代の人が、自分の言葉で自分を語る。そのやり取りがやっぱり生きる力になります。

部落差別はどこにあるか、一番身近なところにあるんです。自分の中に、そういう差別意識が入っているわけです。一番身近な家族の中にあるんです。だからこそ、一番身近な人とそのことを語り合う関係ができていかなければ、問題解決にならないんです。

そんな語り語りを生んでいく世界、3人の言葉、そして、この中には、原田先生の書かれたこの本を読まれた方もおられます。(ニコニコ)中学生、高校生の中には、25年前、26年前の映像を観てもらった人もいます。そういうことも含めて、フロアの皆さんと意見交換ができたと思います。それでは、多くの人に思いを語ってほしいと思います。いかがでしょうか。(会場を見回しながら、最前列で手の挙がった女性に)はい、じゃあ、マイクよろしいですか。

#### 《フロア S》

(立ち上がり、会場を見渡しながら)今年もここに来させていただきました。この鳴門市人権地域フォーラムに来るようになって12年になります。今日のテーマにあります「差別・被差別を超える人権教育」ということで、私は、今年7月18日に亡くなった友(Fさん)のことをお伝えしたいと思います。

その彼女は、本当に自分の地域を愛し、地域の子どもを愛し、1日24時間を30時間にも使っているのではないかというくらい、夜中でも、朝でも、いつでも、「困った」といって相談に来る子どもたちがいればすぐに飛んで行き、困ったという親がいればすぐに飛んで行き、18日に亡くなって19日の葬儀に行った時に、地域の区長さんが、「彼女は解放の母であり、この村の母であった」と言って讃えてくださいました。

(思いが溢れ、言葉がつまりそうになりながら)私は、そういう友だちと出逢って15年くらいになります。彼女から、人を大切にすることというのはこういうことなんだ、自分の思いを伝えながら解放を訴えていくのはこういう人のことを言うんだということを、本当に教えられました。私は部落外に住んでいて、出逢った当時から自分の思いは精一杯伝えてきました。でも、彼女たちの思いを聞いた時に、これが人を大事にする本当の生き方なんだなということを感じて、共に笑ったり怒ったりしてきました。

彼女と色々な所に一緒に研修に行ったり、いつも「私たち幸せだよ。こんなふういろいろな所へ行けるし、いろいろな人とつながれる。そして、いろいろな人から大事にもらえる」と言いながら、ニコニコして学ぶことを本当によろこびとして、共に生きてきた人でした。彼女は私に、「部落外でこういうふう一生懸命してくれるあなたの存在が、私も語ってもいいんだなと思わせてくれた。あなたがいてくれたから今の自分がある」と言ってくれました。

(力を込めて)私も彼女と出逢って、本当に生き方が楽になってきました。自分はこのままでいいんだな。

かっこ悪くてもいいんだな。一生懸命生きている自分をこうして心底信じてくれて、「あなたは私たち部落に暮らす人間の希望なんだ。光なんだ」と言ってくれるこの人たちがいてくれる。そう思えるようになりました。

(フロアの一人ひとりに語りかけるように)そういう中で、本当に、部落外だろうが、部落だろうが、人が人として本気でつながり合って、お互いに支え合いながら、鍛え合いながら、ともに部落解放に向かって歩いていける。そういう関係が持てて、「私たち、生涯、死ぬまで仲間だからね、友だちだからね」と言い合った。

でも、それは亡くなった後も、私は彼女の思いを私の生きる力として、彼女が伝えきれなかった思いを、自分は部落外から部落外の人への発信として、同和教育を単なる人権学習、部落問題学習としてではなく、人間学として、人がどう生きていくかを考えるのが人権教育なんだということ、自分の立場から、ずっとこれからも私の命のある限り、自分の解放運動としてやはり続けていきたいなと思います。この「差別・被差別を超える」ということは、やはりこういうことなのではないのかなと思います。

(元気よく)みんなが自分にできることを小さなことからでもいいから、一步一步前に行くことが、それを実現させていくための大きな一歩ではないのかなと思います。終わります。皆さん、またいろんな意見聞かせてください。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どうもありがとうございました。マイクをつないでくれたらと思います。どうでしょうか。はい。どうぞ。

#### 《フロア S》

(ニコニコと)お話してもいいですか？徳島市川内町で農業(鳴門金時の栽培)をしています。36歳です。今日は勉強させていただいたらうれしいなと思って、この会に参加させてもらいました。(マイクを持ちかえながら、しっかりと前を見て)正直、部落差別してしまう人はしてしまうだろうし、差別せん人はせんでおられるのがこの問題でないかなとか、(一言一言を自分で確認するようにうなずきながら)差別に対してのごっつい怒りは持っとんやけど、怒りを持っとうけんこそ、もっと、この世の中に、こういうのを許さんていうか。

最近、テレビとかでも、何でこんなことがおこるんだというような悲しいニュースがよくあったりするのを見たりしよったら、世の中こんなんでほんまにいけるんかとか、差別に対する怒りを持っとるからこそ、もっとみんなに考えてもらいたいって思いながら、毎日、日々農業しよったり、農業をしながら、いろんなことを思いもって生活しよるつもりなんですけど。こういう人権についてみんなが考える、自分も含めて考えられる空間が、いろんな所に広がってほしいと願っています。

(力を込めて)僕にとって、部落差別って自分にも関わってきたことだし、自分の娘とか、自分の大切な周りの人間、友人を含めて、こんなことでしんどい思いしてたまるかかって思って、自分なりに解釈して生きてきたつもりなんですけど、だからこそ、こういう会は、農業忙しいんやけど、やっぱり、自分にもごっつい自問自答できるきっかけにもなるし、自分を振り返らせてもらったり、差別に対して、やっぱり差別おかしいわって思えるきっかけにさせてもらって、なんかこう、思うんやけど、(力を込めて)だからこそ、自己満足で終わりたくないと言いますか、もっと周りの方に、ナチュラルに、この問題を含めていじめの問題もそうだし、いろんな所にもっとスッと入って行ってほしいなと、最近よく思っています。

(いっぱい笑顔で)やっぱり、最近、鳴門金時とばかり会話しよるんで、人と話をするのは久しぶりで、チンブンカンブンになるかもしれませんが、このことについて考えるの、僕、大好きです。(身振り手振りを加えながら)夫婦でも、僕からの一方的な信号だと思うんですけど、やっぱり、家族で子どもたちも含めてこんなことを、子どもたちにいきなり「部落差別ってどう思う」とは言えませんが、(優しく)「学校



生活はどうで？」から始まったりするんでいいと思っています。

この問題って、ものすごくドロドロして、いじめの問題にしても、地域のこういうフォーラムとかに参加するんですけど、(身構える動作、引く動作など、身振り手振りを力いっぱい加えながら)なんか、どこかで身構えたり、なんかこう、「うわぁ、重い！」というような空間がある会を経験してきた僕にとっては、今回、僕もA先生に担任して頂いてから、気がつけばすごく月日が流れました。

こういう会がある限り、世の中に対してジャブが打てそうと思います。自分に対してもジャブ打って、他人といっぱい話をしたり、社会人になって、いろいろ自分なりに社会貢献もしたいと思ったり、(生き生きと)まだまだあかん点はいろいろあるんやけど、農業精一杯頑張りよるし、美味しい鳴門金時も生産しよるし、やって来よるんやけど、正直な所もっと広げたいと思いました。

それで、正直広げたいけん、僕、部落差別に対していろんな思いもつとるんですけど、百歩譲って、部落差別のことに近づいてみんなが考えていくために、百歩譲って、部落差別はいけんなど、みんながそういう問題とか、人間のドロドロしたものについて考えていけるようにするには、百歩譲って、部落差別のことをふたしていけないかんのか。

自分の住んどの地域では、ふたをしもって、みんなが下からウワアッと近づいてきてからいった方がいいのかとか、いろいろ考えながら今日参加させてもらつとるんですけど、Bさんの話を聞いて、やっぱりこれは百歩譲つとう場合じゃないぞと、改めて、なんかこう、みんなでもっと楽しいに、社会の中で、楽しいにっていうか、ほんまの意味で楽しいに、いろんな人権について、いろんな価値観、いろんな考え方があると思うんやけど、そういうのを出せるような空間というか、教育現場でもっと広げていきたいなと思いつながら、(ニコニコと元気よく)僕も、明日から美味しい鳴門金時を作ると思います。今日は勉強になりました。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(ニコニコと)彼は、鳴門金時を作っている大きな農家なんですが、昨日、神奈川県から来られた先生方や、最初に発言いただいた鳥取県のSさんと、その鳴門金時を収穫している作業場を訪ねました。そこで、彼の家族に迎えていただいたんですが、やっぱり、部落問題を語り合える夫婦の関係というのは幸せだなと思います。彼は、お父さんとお母さんが厳しい結婚差別に出会ったことで、結婚の時に、自分が同和地区であるということを彼女の両親に伝えたら、この良い関係が崩れはしないだろうかと、とうとう自分から(部落出身であることを)言うことはできませんでした。

結婚してしばらくしてからのことです。愛媛県の四国中央市の人権問題の研修会で、彼に壇上から語ってもらった時、その会場にいたパートナー(妻)のEちゃんが、フロアから語ってくれたんです。その言葉が、やっぱり私の心に染み込んでいきます。人間の幸せは、ここにあるんだと実感します。

彼女はこう語ってくれました。

「私は結婚前、両親に、Tさんが自分が同和地区出身であることを、お父さんとお母さんに言うべきかどうかで迷っているということを話をしました。その時両親は、『E子、まだそういうことにこだわる人は、現実におるかもわからん。でも、それは間違っているんだから何も恐れることはない。もし、二人の結婚のことで、とやかく言ってくる親戚がおったら、お父さんとお母さんがしっかり話をするから何も心配することはない。これからはTさんとの生活が長いんだから、Tさんに幸せにしてもらえ。Tさんと幸せな家庭をつくってくれ。それがお父さん、お母さんの願いだ。』と話してくれました。そんな両親を私は誇りに思っています。」

このEちゃんの語りは、ずっと私の心に生き続けています。人間の幸せは、私たちの身近な人間関係の中にあるんだと思います。(力を込めて)愚かな差別に囚われて、人を差別しなければ生きていけない人生は切ないです。そういう問題をきちっと解決していく。おかしいことはおかしいと言える。そういう絆をつくつ

ていく素敵な夫婦である。素敵な家族である。そういう地域社会である。そんなネットワークをつくっていききたいと思うんです。

一人一人の思いが一人一人の心に染みていく。そんな今日の学びを大事にしていきたいと思います。2人語っていただきました。つながっていきましょうか。はい、じゃあ、お願いします。

#### 《フロア 男性》

今日のご苦労さんでございます。藍住町議会におります。「人権教育」「道徳教育」、その内容は人権だけでなく、道徳、モラルは家庭教育の第一歩であると、私はそういうように思っています。それは、躰から。お父さんお母さんから、おじいさんおばあさんと、年老いた人ほど、この人権問題はきついような気がするんですね。それは、やっぱり家庭の躰からということで、悪い人もいたんでしょうが、やっぱり、いい人の例もあげていくことも大事なことだと思います。

先生方も今日たくさん来られているようですが、今日はいろんな会があって、先生方は分散しているようですね。やっぱり、一緒にまとめてもらうなどして…。

そして、講師の先生も、今日病気で欠席ということですが、これもやっぱり、経験豊富な講師の先生があって輪が広がるというか、前のパネリストの先生もおられるんですが、スライドなども使って、皆さんに見えるようにして、成功例というか、取り組む姿勢というか、こういうふうに取り組んだから、こういうような展開で町全体が良くなったとか、そういう語りをもっと豊富にしていいただいたら参考になると思います。よろしくお願ひしたいと思います。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。いかがでしょうか。(前の席から手が挙がる)じゃあ、いきましょう。

#### 《フロア F》

(マイクを握り、はっきりとした口調で、一言一言に思いを込めて)徳島商業高校の保健室の先生をしていますFです。私は、板野中学校の、この今日のパンフレットの写真(1994年11月に開催された第46回全国同和教育研究大会徳島大会前日の全体学習)に載っている全体学習をした生徒で、後ろにいらっしゃる吉成先生に担任をしてもらいました。A先生には私の妹(1999年度板野中学校卒業生)を担当してもらいました。

私自身が全体学習を通して何を学んだかということ、せっかくなので皆さんにお伝えしたいと思うんですけど、パネリストも方々が言っていたように、本当に「ひとごと」から「わがこと」になっていったなあっていうふうに思っています。

私自身は地区外にいますけど、みんな正義感があるから、「差別はあかん」っていうのは小さい頃から教えられてきているし、あかんというのはずっとわかっていて、そういうのを発言してたんやけど、吉成先生に、「家に帰って、お母さんに自分が結婚する時に、相手が部落の人やったらどうするって聞いてみ」と言われて、そういうことはあかん小さい頃から言われてきているし、学校でも差別はいけないと習っているし、家でもいじめはしたらあかん、人に優しくと言われてるから、うちの家の人がそんなこと言うわけないやんと思ひながら、家に帰ってお母さんに聞いたら、「そんなあかんに決まってるやろ。」って言われて。

衝撃を受けて、「ええっ！うちのお母さん、差別する人やったんや」みたいな、もう、そこから「ひとごと」やったのが「わがこと」になって、本当に、Dさんが言っていたように「恥ずかしい」という気持ちになりました。

みんな差別はいけないと言っていて、差別をなくそうとしているのに、うちの親は差別してる。それで、普通の生活でおばあちゃんとかが言っていたような、「あそこの家の人とは遊ばれん」までは言わなかったけど、「あそこの地区の人には、うちの祭りには来てもらいたあないわ。」みたいなことを聞いたことがある

から、多分それもそうだったんや。あれもそうだったんやと気づいていって、本当に、恥ずかしいというのもあったけど、やっぱりどこかで、なんだろう、自分は地区外だ、差別されんですむってというような安心感もきつとあったんやと思うんです。そこがやっぱり自分の中の差別意識やったと思うから、そこに向き合いながら学習を進めていく。

地区外の子も地区の子も一緒になって、「部落差別をなくすってどうしたらいいんだろう」「どうやったらなくなるんだろう」って、仲間の思いに本当の思いを返していく、思いをつないでいく、自分と向き合っていく、人とも向き合っていくっていうのを、ずっとしていけて、それが本当に楽しかったというか、すごく苦しかったけど、「つながりができる」「仲間とつながれるよろこび」っていうのがすごくありました。

(一言一言を自分の中で確かめるように)私自身、教員として働いていく中で、子どもたちに、じゃあ部落問題学習をしているかって言ったら、今はしてないです。人権学習っていうのはあるんですが、その一つとして取り上げることも、学校ではないです。

他のいろんなものがあって、私自身がクラスを持ってないので、授業は担当することはないんですけど、ほかの障害者差別だったり、LGBT(性的少数者への理解)だったりとかっていう、保健に関わるようなことはすべて伝えているし、普通の生徒の対応でもしているし、部落問題学習というのでバーンと表に出してはしてないけども、全体学習で学んだ、自分と向き合うこと、人と向き合うこと、人とつながって、仲間をつくって、クラスみんな、学校全体としてやっていくっていうこと。つながり合っていく、お互いに支え合っていく、育ち合っていくということは、本当にしていきたいなと思って、それができるようないろんな取り組みをしています。

私も娘がいるんですけど、娘の保育所は、そういう、親みんなが先生みんなと手をつなぎながら、子どもみんなを育てていくってような活動というか、そういうふうな保育所に入れて、同じように子育てを通して自分と向き合って、子どもと向き合って、同じ子育て仲間の人、先生と向き合って、つながり合いながらお互いに育ち合っていくということをしています。

それから、本当に、全体学習っていうのは、もちろんスタートは部落問題学習なんですけど、その人が生きる生き方、人との向き合い方、自分との向き合い方、どうやって生きていくか。やっぱり、人って人の中でしか育たないと思うので、どうやって本当に人として生きていくかっていうのを考えることができる。体験できることができる。そんなふうな、その人の生きる力になっていくものだと思います。以上です。(拍手)

## 《コーディネーター A》

今、話に出ていましたけど、板野中学校の場合は、クラスに5~10人地区の生徒がいるんです。普通に自分の言葉で自分のことを語っていける地区の生徒がどんどん増えていくんです。その生徒らが隠すこともなく堂々と語っていきます。その語り語りを生んでいく。(身振り手振りを交えながら)そういう学校というのは、もう稀です。地区の生徒のいない学校が大半です。いてもいないことになっているのが現実です。

でも、できるんです。みんなが自分の言葉で自分のことが語り合えたら、そこに深い深い絆ができたなら、仲間を信頼できたなら、仲間を尊敬できたなら。地域社会もそうです。やっぱり、その集団の一員として、自分というものを深く見つめる作業ができたなら、周りの人を本当に大事にできるんです。

そういう関係の中に、様々な人権問題を見事に克服していく関係性が生まれてきて、生きるよろこびが私たちのものになっていくんだと思います。そういう自分をつくっていくために、自分を伝えていく作業も、今はここまででも、(手をかざし高さを変えて示しながら)次はここまで、次はここまでと、そういう繰り返しの中で人間というのは変わっていけるし、幸せになっていくんだと思います。

いろんな思いが溢れていく時間にしたいと思います。どうぞ。

## 《フロア S》

(ニコニコと身体いっぱいによろこびを表しながら)徳島北高校1年のSです。さっきのA先生の話が、そのまんまだなと思ったんです。(パネリストの方に手を伸ばしながら、生き生きと)私は、この方たち3人を見たことがあります。(コーディネーターに思わず笑みがこぼれる)皆さんの中学時代の人権・部落問題学習のビデオで観ました。(「人権を語り合う中学生交流集会」の実行委員会において、部落問題学習の本質を伝えるために、1991年度板野中学校3年B組が取り組んだ板野郡同和教育研究会公開授業、第25回全日本中学校道徳教育研究会徳島大会特別公開授業、第21回徳島県中学校同和教育研究会公開授業を鑑賞している)

私は、中学生集会とかに参加してて、すごいその会が好きなんです。(絶えず楽しそうに身体を動かしながら)この間も高校生になったけど、もう1回行こうと思うくらい好きなんです。その会の大元になっているのが、この方たち(3人のパネリスト)なんだなあと思ったら、ビデオの映像を観ている時もだったんですけど、「すごいなあ」と思ってきました。

自分は、中学校の授業の中で、あまり語り合いの学習みたいのものはなくて、授業では、ちゃんと自分のことをしゃべったりはできていなかったんですけど、A先生に出会って、人権集会の場にいっぱい行くようになって、そこで、いっぱいしゃべって、すごい仲間がいっぱいできて、今、ここの横に座っている友だち(母が板野中学校の卒業生であり、中学時代に全体学習に取り組んだ中心メンバーの1人)は、同じ高校1年生なんですけど、人権集会でできた仲間なんですよ。

みんなでいろんなことを話して、いろんなことを聞いて、返したりしていく中で、この間、今年の中学生の人権集会で一緒におった時に、Rちゃんっていうんですけど、(ニコニコと何度も隣の女子高生と言葉を確認し合いながら)Rちゃんが、うちに、「部落の話をする時に、名札?名札をギュッと握る」って言いよったんですよ。

それは、「自分の名前を誇りに思っとるけん」っていうのを聞いて、(あふれる笑顔で)「うわああ!!」ってなったんですよ。なんか、そんなことを聞いてすごい救われたし、そういう、自分のことを、部落出身っていうことを誇りに思っとるって言うくらい、そういう場があるんだなあと思ったら、ほんまに、この人権集会でできた仲間ってすごいなああって思って、本当にいいなあと思います。

そんな人権集会の土台をつくってくださって、(パネリスト3人にしっかりとお辞儀をしながら)本当にありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(発言者にあふれるような笑顔を送りながら)ありがとうございます。いっぱい思いをつないでいけたらと思います。どうぞ。

## 《フロア F》

小豆島から来ましたFです。25年前に語って、その関係性がずっと自分たちを支えていたり、もう一度自分を見直すきっかけになったり、それって本当にすごいなあと思います。(一言一言をじっくりと噛みしめるように)私は小豆島に住んでいるんです。とても人も温かいし、自然も豊かだし、最近いろんな所で脚光を浴びているんですけど、それでもやっぱり部落差別があります。

どこに住んでいるかとか、どこで生まれたかとかで、色眼鏡で見られたりとか、結婚の時に苗字を聞かれてそれで反対されたりとか、そういう現実がたくさんあって、僕は教員なんですけど、腹が立つし、それを一緒に子どもたちと考えていくんですけど、なくそうと思ってるいろいろ部落問題学習などしていくんですけど、やっぱり、ここに書いてあるように、どれだけ子どもらと教師の自分たちが「わがこと」にしていくかって

いうことで、いつもぶつかってきました。

当時、徳島の板野中学校ってところで、こんな学習(全体学習)をしているよということを僕も聞いていたんです。でも、その時はやっぱり、「その学校(板野中学校)だからできるんだろう」とか「その人たち(被差別部落出身の先生)だからできるんだろうな」と思っていて、でも、いろんな所でいろんな人と話をしたり、その取り組みも少しずつ広がって行って、「僕らも本当に学んでみよう」ということで、いろいろ勉強させてもらいました。

小豆島でも、ムラの子がちゃんと自分のことをみんなの前で語るとか、その姿を見て周りの子が本気で受け止めるという関係性がなかったの、「全体学習っていうのを、物まねでもいいから僕らもやってみよう」と言って始めて、何年間か続けてきました。

その何年間かした時に、A先生や、先ほど発言したT君たちが来てくれて、僕たちの子どもの前で教師と生徒の立場として本当に語ってくれたんです。それを聞いた当時の子どもたちが、本当に自分の気持ちを一生懸命振り絞って語って、その会(全体学習)の最後の最後に、手を挙げた子が「自分が部落出身です」と語って、初めて僕らの学校で、1人の生徒が立場を宣言するということになりました。

その姿が、大きく僕らの学校の人権教育、同和教育を変えてくれました。子どもも本気になったし、周りの先生方も本気になったし、そこから本気でやらなければいけないという動きに変わってきました。今はその隣の土庄中学校にいますが、その中学校でも、今、全体学習をやっています。土庄中学校で「心の集い」という名前を付けていますが、それはやっぱり、いいことも悪いことも含めて、自分たちが本気で自分たちのことを言う。そういう関係性をつくっていきましょうとします。

でも、そう毎年毎年同じテンションでうまいこといたりとか、同じ関係性はできないです。でも、ここへ来て改めて、中学生の時に1回でも、1回でもというのはおかしいですが、本気で語ることが先々ずっとつながっていくんだなということを再認識しました。勉強していく中で、さっき言われていた「家に帰って自分が結婚する時に、親が反対するか聞いてきたら」という問いを僕らもやっているんですけど、半分以上の子が家でぶつかって、「自分の親って差別者なんだ」とショックを受けて、また学校へ来ます。

そこでもう1回自分たちで、「じゃあ、どうやって親を説得するか頑張ってみようや」と話し合い、何回も何回も繰り返し親を説得していく姿があったり、子どもたちが、自分たちの力で親を変えていこうというふうな動きになりつつあります。なかなか大人は変わらないですけど、子どもたちが少しずつでも大人に伝えていくことで変わっていくんじゃないかなと思います。多分、1年や2年では無理ですし、10年、20年かかるかもしれないですけど、やり続けていくと、何か少しでも変わるのではないかと取り組みを続けています。中学生とか、高校生とか、そういう時期に、本気で語り合うことができるんだということを再認識させていただきました。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(発言者と参加者全体に精一杯の思いを返そうと)ありがとうございました。中学生が震えながら、ドキドキしながら、自分の言葉で、言葉を絞り出しながら語る姿というのは本当に美しいです。こちらの身体が熱くなるんです。

中学生に鍛えられます。子どもらに伝え続けていける自分でありたいし、共に歩き続けていく自分でありたいと思います。どんなに厳しい部落差別をする人と出逢っても、それをきちっと解決していける関係を見せられたら、人は変わります。

(しみじみと)なかなか地区と地区外の交流が進まないことがあります。でも、そのつながりができていたら、あれだけこだわって部落差別に怯えていた人が、あれだけ変わるかという、そんな現実といっぱい出会います。知ることです。学ぶことです。つながることです。出逢うことです。その中で私たちの世界が変わります。

そして、やっぱり自分を強くすることです。それは、やっぱり自分を表現するということです。「わがこと」というのは、自分のことを語っていかねば変わりません。表面的なことではなくて、心の内を出すことで、それに仲間が返していく中で、深い深い絆ができます。そういう中で変わっていくんです。そういうつながりをつくる、そんな時間になればと思います。つながっていきましょか。どうぞ。

## 《フロア 女性》

私も香川県つながりで話をさせていただきます。香川県の小学校の教員です。私は、この4月から鳴門教育大学に來ています。鳴門に來て4か月ですけど、私は香川県でも東の方にいますので、鳴門と香川ってそんなに違わんと思ってきたんですけど、ずいぶん違うんですね。(身振り手振りを加えながら、ニコニコと)なんか、私は4か月暮らしただけで、私の前世はひょっとしたら鳴門の人だったんと違うかなと思うくらい、鳴門がしっくりきています。

(まわりに笑いが起こる)朝起きたら妙見山に登ることを日課にしています。鳴門教育大学に來ていることと、鳴門にもう一つ縁があるのが、私が來るより1年前に、娘が鳴門渦潮高校に來ています。娘が徳島に來る時に、こんなに早く自分の手元を離れると思っていなかったの、慌てて同和問題について娘と語ったことを思い出します。充分なことを教えないままに徳島に送り出してしまったので、ちょっと心配もあるんですけど、実は、1つ聞いてください。(ニコニコと)こんなに大好きな鳴門であり、徳島であり、「どこまでサービスするん？ひょっとしたら裏心あるんと違う？」と疑ってしまうくらい、人に優しく、人を大事にする徳島は大好きなんですけど、1つだけ変わってほしいなと思うことがあるんです。

それは、昔から決まってきたこととか、昔からつながってきたことに、異論というか、見方をあまり変えない所があるのと違うかなと、この4か月で思いました。4か月で思ったこともあるんですが、実は1年4か月前、娘の鳴門渦潮高校の入学式でも思いました。

娘の入学式に参列した時に、娘は出席番号順に入場してくるんですけど、男の子が前でした。男の子が全員入場した後に、女の子がついてきました。香川の入学式を見慣れている私にとっては衝撃でした。男の子の下に、男の子の後に、女の子がおるんかと思って、この間、研修会でA先生にぶついたら「何がおかしいんですか？」って言われました。ああ、徳島はそういう考え方なんだなあと思いましたが、ここで負けたらあかんと思うから、徳島でこんなふうに入場する時に、徳島の人には嫌われるかもわかりんですけど、必ずこの話をします。

娘は、徳島の先生が一生懸命に陸上競技を教えてくれるので、「徳島でしか私は陸上をせん」と言って、こっちへ來ました。頑張っています。親としても、高校から娘を出すのは早いなと思ったんですけど、「じゃあ、そこまで子どもが思うんやったら、行ってらっしゃい」と言って送り出した途端だったんです。(力を込めて)その入学式を見た時に、「しもうた！鳴門にやるんと違うかった」と私自身は思いました。その気持ちは娘には伝えなかったんですが、胸の中でジクジクとありました。でも、何でそこまでしてまで鳴門に來るんやろ。何で徳島が好きなんやろって、それが知りたくて、私自身も鳴門に來た部分もあります。

今日も、「ひとごと」から「わがこと」へと書かれています。うちの娘を、女の子やからとか、香川の子やからって見て欲しくないんです。1人の人間として、1人の高校生として、徳島の皆さんに迎えていただきたいという気持ちを持って、私は今日ここにおります。

(うれしそうに)さっきもお会いした方に「おめでとう」と言われたんですが、華々しく、うちの娘は写真入りで徳島新聞に載っていました。そのインタビューの中で娘がこう答えていました。「徳島に來てほんまに良かった」と。娘は、私がこんな気持ちでおるのは知らんと思います。ただ、そんな大好きな徳島で、温かい先生に囲まれている徳島で、是非、1人の人間として迎えてやってほしい。そんなふうと思っています。今日はありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター A》

ありがとうございました。どうでしょうか。はい、じゃあお願いします。

## 《フロア 中学生》

(立ち上がり、緊張の中で懸命に言葉を探しながら)私は中学校で、BさんやCさんのお話や授業をビデオで観たりしたことがあって、今日、このフォーラムでお話を聞いて、ビデオの中のことが現実的なものになって、私の中に落ちてきました。私はまだまだ部落差別について知らないことばかりだと思うし、つらいことがあるんだと思っています。これからもっと部落差別とかについて学んでいって、部落差別を学んでいく中で、私たちが生きていく中で出会ういろんな差別について考えていけたらいいなと思いました。終わります。(拍手の中、発言を終えてホッとしたように席に着く)

## 《コーディネーター A》

(ニコニコしながら、発言した中学生に応えるように)ありがとうね。ドキドキしながら、手を挙げてくれました。是非、つながってください。どなたか。…どうぞ。

## 《フロア M》

私も香川県で、小豆島とは対照的な山間の中学校から来ました。今、中学生とか卒業した皆さんの話している姿を見て、心が温かくなりました。自分自身は、小学校の時には、鼻水をたらしながらボーッとした子どもだったので、中学校の段階で、こういう考えを発表できる中学生、高校生がおるのがすごいなと思います。

(当時を振り返るように)私自身は、高校の時に、人権・同和教育を熱心にされている先生がいらっやっつて、それが社会科の授業の中で、部落問題について語ってくれたのがスタートでした。でも、それにもかかわらず、教員になってからも、実際に自分が人権教育を担当した時も「ひとごと」やったなあ。仕事としてやっていたなと思って、部落の方からも、「先生は、鎧(よろい)を着とる。」と言われて、「ああ、見抜かれとるな」と感じるのがスタートでした。その時は、仕事としてだけでやっていたなというところがあったので、なかなかうまくいかんかったなと思います。

(しみじみと)ただ、それでも、少しずつそういう仕事を続けていく中で自分が感じたのは、1つは、自分の子どもが生まれてきた時に、今は元気にやっているんですが、非常に成長が遅くて、なかなか首が据わらない、言葉が出ない、これはかなりの大きな支援がいるんじゃないかなと思っていた中で、他の子どもとは同じようには生活できないなと、2歳の子どもを見ていて思った時に、子どもへの考え方で役に立つのは、他の教育にはなくて、人権・同和教育の考え方で自分の子どもを見ると、この子なりに一番幸せに生きていく道をと考えることができました。そんな時に、この考え方が役に立っているなと思います。

今日は、スイミングスクールの合宿で、愛媛県から帰って来ていると思うんですが、最近は少しずつほかの子に追いつきながら、いろんなことができるようになってきているんですが、その時の思いを、1人の親として忘れないようにしながら、教師として、この人権・同和教育に向き合いたいなと思った頃から、こういった会に今日も出させてもらったんですが、人権・同和教育を真剣に考えている人の思いに触れることで、温かいものが広がっていくというのを、自分自身が学ぶようになってきました。

僕は、実践というのは、まだまだできていない段階なんですけど、こういう思いを少しずつ自分自身が味わって行って、少しでも広げていけるようになるのが大事なことかなと思って、今、発言させてもらっています。

フロアからもあったんですが、社会全体で、どちらかというと自分のことばかり考えている世の中があるからこそ、今日のような会の視点が大事かなと思っていて、身近な所からでも少しずつでも変えていけたら

いいかなと思います。

私のいる中学校は、田舎の小さな学校のことで、自分を語るということが、進めてはいるんですが難しいところがあります。幼少の頃からよく知っている部分、知らない所で自分の思いを語るというのは結構簡単なんですが、幼い頃からの自分の恥ずかしい姿を知っている中で、自分を語ることってすごく難しいことだと痛感しています。

この壁を超えるために、A先生からも力を貸していただいて、狭い人間関係の中を突き崩していくきっかけにしていきたいと思っています。ご協力、よろしくお願いします。今日はありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

この時間を大事にしたいと思います。(前で手の挙がった男性に発言を促しかけるが、反対側の前の席の手の挙がった男性に)こちらから先にいきましょうか。どうぞ。

#### 《フロア I》

失礼します。藍住中学校のIと申します。板野中学校の先輩方と、藍住中学校の生徒が頑張ってるので、これは黙っておれないなと思って手を挙げました。(壇上の全員がニコニコしながら聞いている中で)全体学習の時の、みんなの発言を聞きながら、どうしようか発言しようかと迷っている自分を思い出しました。

僕自身も、全体学習を積み重ねてきて、その経験をもとに、何年か前に、前で(パネリストとして)しゃべらせてもらったんですけど、ちょっとDさんと通じるところもあって、その時にも薄っぺらいなあという思いがありました。力不足だったかもしれませんが、それでもまだ、「ひとごと」だったなあという感じで思い出しています。

…いろいろ言いたいことはあるんですけど、(懸命に言葉を探しながら、生き生きと)中学校3年間で、それなりに自分も発言をして頑張ってきたつもりだったんですけど、僕は地区外なんですけど、地区外の立場からすると、100%寄り添えてないところの自分があって、一生懸命寄り添おうと思って言うんですけど、実際はどう感じているのかなとか、全体学習の時だけしか頑張れていない自分。でも、地区の中の友だちも当然一緒に遊んでいましたし、仲よくもしていました。

何で、僕とこの子は差別される側とする側に分けられているんだろうと、一緒に生活しながら、そういう葛藤を抱きながらおったんですけど、でも、その子にとっては、日常、365日意識していかなければならない状況がある中で、僕は、「全体学習があるから、よし頑張ろう」という所で終わっていたなというところが、今でもあります。

ただ、自分の思いを言わない限りはつながれないと思っていましたし、必ず自分の後に続いてくれる友だちがおったりしてくれたので、それを頑張って続けて来られたし、続けて来たから、今、ここに立って、先輩方ともつながっています。たくさんの方に話を聞いていただく場もできたので、幸せだったのかなとも思います。

(何から話そうかと迷いながら)僕自身が頑張ってる今やろうかと思っているのは、今の学級の生徒に、とりあえず、自分の思いを語る所から始めようかなと思ってやっています。できるだけ自分の正直な部分を出しながら、何か感じてもらえることがあったら、どこかで、こういうA先生とお三方のように、いい関係ができたらいいなと思って、今も頑張っています。以上です。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございます。(先に指名しかけていた男性にマイクを回す)じゃあ、お願いします。



## 《フロア N》

(最前列からフロアを向いて)神奈川県藤沢から来ました、Nと申します。(溢れるような笑顔の中で)さっき一緒に手を挙げたんですけど、A先生が先にあちらの方を指名されて、じゃあ、若者からかなとショックを受けまして、(フロアに温かい笑いが起こる)まあ、しょうがないです。

若者じゃないので、しょうがないんですけど、今日、ロビンソンさんのお話があったように、私は神奈川県藤沢ですから、教育委員会で社会教育主事をしていた時は、「同和・人権教育」ということで、社会教育を進めていました。今は同和ということは出してこないと思いますね。取り上げることもないですね。

(パネリストを振り返りながら)さっき言われたように、話題にはなかなかかなりにくいというのはあると思います。何度も自分がここに来て、「何で来るのかな」と、自問しながら毎年来るんですけど、前にお話したんですけど、私は元々教員ですから、子どもと接するのが好きなんです。

今は、66歳で退職していますけど、仕事をしながら、土曜日に夕方5時から9時まで、仕事を終えてから何人かで学習支援をしています。そこに来る子どもたちは、塾に行けない家庭もあります。塾に行っていると、学校に行くのと同じから嫌だっている子もいます。それから支援学級に行っている子もいます。

その中で今、高校2年生になっている女の子がいて、その子が、初めて会ったのは、小学校5年生の時、どちらかというと寡黙(かもく)な、ほとんどしゃべらない感じだったんです。女の子なんですけど、こんなことを言ったらいけないかな?(ニコニコと)野球をやっているんですね。野球が終わった後、急いでくるものですから、汗びっしょりで汗臭いんですね。シャワー浴びて来いよと思うんですけど、本人は気にしないんですね。

なかなかしゃべらないで、コツコツと一生懸命やっていく。例えば、四字熟語なんて覚えると、「弱肉強食」という言葉を「絶対『焼肉定食』じゃないぞ」と言うと、唱えているんです。「弱肉強食」「焼肉定食」なんて言いながらコツコツと覚えていく。

だから、正直高校へ行くのは難しいのかなと思ったら、高校へ入って、今、高校2年生になって、やり方や学習の仕方は同じなんですけど、この間、「数学、頑張れて2番になった」と言ってテストを持ってきたり、ある時、小学生が来ているんですけど、その子らがケンカをしたんですね。

我々は人数が少ないので、他の子に対応していたら、その高校2年生の子が、説教じゃないですけど、「さっきは君がこういうことをしたからいけないんだ。君もこういうことをやったからいけないんだよ。」と、仲裁に入っているんですね。しっかりと高校2年生の子が、小学生の子を諭している。学習も面倒を見ているんです。

そういう所を見ると、すごくうれしいんですね。我々は5~6人で教えているんですけど、教員だったのは私1人で、他の人は違う仕事にしながらやってきた、私と同じくらいの年齢の人なんですけど。ふと思ったんですね。そういうのがうれしく思えて、ボランティアでずっと続けてきて、「同和・人権教育」と言っているけれども、神奈川の方には同和問題とかはないけど、子どもと接する、人と接する時の、子どもが変わっていく、人が変わっていく時のよろこびを感じられる自分がうれしいなと思うし、自分もこの年になっても変わっていけるというのがあって、こういうところに来て、「頑張ろう」とか、「こういう人がいるんだ」「こういう意見があるんだ」ということに接することができるのが、ここに来る理由なんだと、最近気がつきました。

徳島は食べ物もおいしいし、いい人ばかりとは思いません、いろんな人がいるでしょうけど、正直にいろいろ話し合えて、そういうのが今の自分の気持ちかなということを話させていただきました。本当はね、今日はしゃべらないっていう約束だったんですけどね、(前の席の共に参加した仲間と笑い合いながら)つい、やっぱりしゃべってしまいました。すみません。終わります。(拍手)

## 《コーディネーター A》

(楽しそうに)ありがとうございました。どうぞ、いかがでしょうか？それじゃあ、いきましょうか。お願いします。

## 《フロア N》

(はっきりと丁寧な口調で、ゆっくりと)北島町から来ました。Nと申します。中学の2年生の時にA先生が、私の出身中学校である北島中学校に赴任して来られ、中学校2年生と3年生と、語り合いの人権学習を2年間やってきました。

中学校2年間は、本当に、私はちなみに地区外の人間なんですけれども、同和地区のそういう差別があるってこと自体も私は全然知らなくて、A先生に出会って初めて、世の中にはたくさん差別があるけど、こういう差別もあるんだということを知ったんです。

それまで知らなかった自分って、まあ、月並みな言葉ですけど、無知が一番怖いって、その時も思いましたし、今日も、久しぶりにこういう人権の会に参加させていただいて、本当に知らない、自分が関わらない、無関心っていうのは、それはやろうと思えば生きていけるんですけど。でも、それで人間同士が支え合う世の中ってできていかないなあって、今日改めて感じました。

まあ、私自身の話をちょっとさせていただくんですけども、やっぱり、同和地区とか地区外とか、自分の生まれ、故郷、自分の両親、そういう、自分がどこから来たかっていうのって、全て自分のルーツじゃないですか。そんな、自分の親やいろんな歴史があって、日本という国に生まれて今の自分がある。で、私は、地区外の人間で、日本で生まれたんですけど、私の祖父が韓国人で、私は韓国が4分の1入っていて、4分の3は日本人です…。ということを知ったのが、小学校の3年生か4年生の頃だったんですけど、それを知った時、私はそれを悪いことだとは捉えなかったんです。何で今まで親が私にそれを黙っていたのかっていうことが疑問なぐらいで、全然私は悪いイメージがなかったんです。

ただ驚きだったんですけど、やっぱり、ニュースで北朝鮮だとか、核問題とか、最近もミサイルとかありましたけど、やっぱりそういうニュースを気にして見るようになったんですね。やっぱりこれって私だけの問題じゃないっていうか、まあ、そんなに大きなことは言えないんですけど、やっぱり、ここで、今日集まっている皆さんと語り合うようなことが、その地域に広がって行って、国やいろんなコミュニティに広がって行って、やっぱり直につながっていくんじゃないかなって、私は中学校でA先生に出会えて、そういうような考えを持つようになりました。

(前を向き、しっかりと)中学校を卒業して、高校、大学に行きました。やっぱり、中学校の時はそういう語り合いだとか、そこに書いてありますが、『「ひとごと」から「わがこと」へ～自己をみつめて、語り、人と人がつながる』っていうことを、すごく考えてきたんですけど、やっぱり、外の世界に出たり、私は県外の大学に行っていたんですけど、県外に出ると、やっぱりそういうことを考える機会っていうのが少なくなってしまうんですね。現実的に。今日も、久しぶりにこの会に参加させていただいて、あー、自分は忘れていた。忘れていたっていうか、忘れちゃいけないって思っていたのに、あー、変わってたんだなあって、気づきました。

なので…、私がさっき疑問に思ったのは、テレビの報道番組を見ていて、私も憤りを感じる事がすごく多いんですけど、プライバシーの問題とか、たくさん問題があるんだと思うんですけど、報道番組やそういうメディアで同和地区の問題や、人権の問題、人種差別であるとか、障がい者差別であるとか、たくさんそういうのが取り上げられていますけど、どうなんでしょう。

この発言自体がちょっと問題なのかもしれないんですけど、何で、世の中はこの同和問題を取り上げないんだらうって、今日、それが私の一番の憤りであり、問題であり、何でなんだらうって、私にできることは何なんだらうって、そのことを一番強く感じました。

(笑顔で)私は、今、…学習塾で補助をしているアドバイザーの身なんですけど、やっぱり…子どもたちがこの先の未来をつくっていくので、大人が子どもに発信する。子どもも大人に発信する。そういう、世代を超えたつながりやディスカッションというのが、世の中にもっともっと増えていったらいいなと思っています。以上です。ありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

どうぞ。つながっていきましょう。

#### 《フロア K》

香川県のKと言います。20年くらい前に板野中学校と接触をさせてもらって、当時、豊中中学校というところにいたんですけど、豊中中学校でも板野中学校と同じような、語りながらつながり合う学習というのを、ずっと模索してやってきました。A先生にも実際に豊中町というところにも来ていただいて、ある程度それが軌道に乗ってきたんです。

徳島県の中学生集会にも、豊中中学校の子どもたちも連れて来て、徳島の中学生と一緒に同じように語って、その子らが豊中中学校の語り合う学習の中心になっていったんです。

それで、3年生の時にですね、150人くらい生徒がいる中で、地区の子が5人くらいです。その中の1人が、県の道德の研究授業の時に、「実は自分は部落出身です」というような語りを、県下の先生がいる前でしたんです。その後、いろんな周りの生徒たちからの発言がありました。本当に子どもたちが、その時だけではないんですけど、その学年は何回もそういう経験をして一つになることができ、大変良かったんです。

まさに、そういう学習の中心になっていった子が、…(言葉を探しながら)私が思っているような、人として道を外さない、ちょっと変な言い方なんですけど、具体的には言えないので、あえてこういう表現をしているんですけど、そういう生き方ができなくて、…残念な事実が起きてですね…。つい最近のことです。

全体的に思いを語りながら仲間がつながる、それは大事なことだと私は思っています。でも、そうやって熱く語った子がですね、何でそういうふうになったのかというのが、私の中でひどく重くズシンと入ってきて、今日も、このことを言おうかどうか迷ったんですけど、やっぱり、それはそれで大事なんだなと思いますが、ただ、自分の関わりの甘さというのがあって、こういうことになったんだろうと、今は総括をしています。

今日、この場にきたのはですね、さっき、一緒に来たM先生がいる中学校にA先生を呼びたいということがあります。私は退職したんですけど、3月31日まで私のいた学校です。あと一息ですごくいい集団になる可能性のある学校なんです。残念ながら、私が3月31日までいた段階で、そういう、良い生徒になる可能性のある子どもたちを、引き上げることができませんでした。

だから、A先生に11月に来てくださいというお願いをするということが、どちらかと言えばメインの目的でこの場に参加させてもらいました。本心を言えば気分は重たいんですけど、方向は絶対間違っていないということで、今後も頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました。(拍手)

#### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。様々な年代の方から、たくさんの思いを語っていただきました。本当に力をいただきます。中学生・高校生の言葉にやっぱり力がわきます。最後にパネリストの3人から、一言ずつ思いを語っていただきます。Bさん、いきましょう。

#### 《パネリスト B》

(一言一言を噛みしめるように)先ほど、初めの方に、夫婦で部落問題を話し合っているというお話をされ

ましたが、私の夫とは部落問題については、腫れ物に触るように感じて、なかなか話せません。正直言って。

それで思ったんですけれども、私は部落外の人と結婚しました。それで、差別から遠ざかっていて、なにか、「わがこと」から「ひとごと」になってきているような自分に、今日気づきました。たくさんのお話を聞かせていただいて、気づかせていただいて、本当に良かったなって思っています。私たち夫婦も、これから気軽に部落問題について話せるような関係になっていけたらいいなと思いながら、話を聞かせていただきました。今日はありがとうございました。(拍手)

### 《パネリスト C》

今回、いろんな方の意見を聞かせていただきまして、ありがとうございました。だいぶ中学生の時から年齢を重ねて、いろんな輪がいろんな所で広がっている所にうれしいと感じているところもあります。

各地域でこういった全体の広がりの中で、中学生・高校生の方が自分の意見を言う。自分の苦しい所をさらけ出して、その周りの同級生、友だちがそれを支えて、先生方も支えていただいているというお話をお聞きして、そういう輪が広がっていくということがうれしく感じました。

そういう状況を聞くことができたので、自分のこととしましては、休憩ではないですが、中学生の時のような熱い闘いができていない面もありますので、妻とも話し合いがあまりできていない所もありますので、その所から始めて、自分の周りで、そういった話をもっと気軽に気楽にできるようになればいいと思いました。ありがとうございました。

### 《パネリスト D》

(緊張感の中にも生き生きと)今日は皆さんの意見をいろいろと聞かせていただいて、本当に勉強になりました。私は最初に言ったように、後ろめたい気持ちでここに来たんですけど、高校生の子が、すごくニコニコと、友だちと話しながら、この問題をやっているというのを聞いてすごくうれしくなりました。

私も、中学校の時の絆というのは切れていると思ってて、ここに来て、Bちゃんと話したんですけど、Bちゃんに、私はあんなに頑張っていたけど、今は逃げている自分があるって、すごく申し訳ないと思っていると言ったら、Bちゃんが、「Dちゃんが言ってくれたことはちゃんと心に残っているよ。心の支えになっているよ。」と言ってくれたのが、私としては救いになりました。

私たちの場合は、同和教育だったけど、今は、いじめの問題とか、人権の問題とか、いろんな問題があると思うんですけど、中学生の時とか高校生とか、すごく柔らかい心の時にやったことってというのは、すごくこれからの支えとなって残ると思うし、A先生とかもいて、先生たちも、子どもたちのためや自分のために頑張っていらっしゃる先生がいるっていうことが、うれしかったです。

私も娘もいるんですけど、そういう大人の人に出会っていけるなら、まだまだ自分も大丈夫だと思いました。道徳とか同和教育、人権教育で言われている、躰とかモラルっていうのは、皆さん当たり前のことだと思うので、落とし込んで行ってください。私も頑張らなあかんと思いました。ありがとうございました。

### 《コーディネーター A》

ありがとうございました。今日いろんな思いを出していただきました。もっとお話したい方もおいでだと思うんですけど、時間の関係で切らせていただきました。本当に申し訳ないです。

さっき、K先生にも話していただきましたが、人間っていうのは、なかなか変わらない所もあるし、いろんなものを背負っています。いろんなしがらみの中で生きています。しかし、絆をつくり続けていくしかないし、繰り返し繰り返し、やっぱり問い続けていくしかないし、自分を表現するという誇りやよろこびを自分のものとしていくしかないと思うんです。

この中にも、たくさん学校の先生もおいでだと思いますが、やっぱり教師だと思うんです。教師が語ら

なかったら、親が語らなかったら、子どもたちはやっぱり本気で語らないと思うんです。(魂を込めて力強く)教師がよろこびにならなかったら、全体学習を待ちこがれるようになっていかなかったら、子どもたちと語り合えることをよろこびにしていける、そんな集団になっていかなかったら、その時間が生きて働くものにはならないんです。

私は、この、前のパネリストとして話をしてもらった3人がいた板野中学校の3年B組という集団から、徹底的のそのことを教えられました。見事です。生徒が生徒を変えると世界があるんだと思いました。もう何百回も、あの3年B組が闘った第25回全日本中学校道徳大会徳島大会特別公開授業の映像を観てみますけど、観るたびに身体が熱くなります。その生徒たちの言葉が私を揺さぶってくれます。その3週間後に実施した、第21回徳島県同和教育研究大会公開授業の映像なども観ています、この子どもたちの言葉に、私は救われました。私を、この子どもたちと歩き続けていくという気持ちにしてくれました。

たくさんの方がその授業を観てくれて、感動を噛みしめてくれた日に、C君が綴ってくれた生活ノートを紹介して、この会を終わります。彼の文章はすごいです。何回も使わせてもらっている原稿です。(壇上のCさんの方を向き、雰囲気を楽しむように)読ませてもらってよろしいですか?(Cさんの、うなずくのを受けて)では、使わせてもらいます。

**【部落問題学習でつかんだもの、それは3年B組という固い団結の絆だと思う。一人一人の悲しみが怒りとなって語り合い、そして支え合っている。**

公開学習が終わったとき、男の先生が僕のところにきて、「頑張ったなあ」とか「よかった」とかいうようなことを言ってくれた。僕はものすごくうれしかった。発表して本当によかったと思った。この先生だけでなくほとんどの先生たちが、この学習の大切さをわかってくれたと思う。

この3年B組で、この3年生で、そしてこの板野中学校で燃やしたこの炎を多くの先生たちが、また誰かにつないでくれたらと思う。

自分の思いを語っていくことによって自分という人間が変わったと思う。2年生に比べて明るくなったと思うし、物事をよく見るようになった。

そして、朝がさわやかに感じられ、人の優しさというものが見えてきたと思う。今日帰るときコスモスの花が太陽に照らされていた。まるで僕に勇気をくれているような気がした。

過去を背負うのではなく未来に希望を持ちながら頑張っていきたいと思う。これからも悲しさではなくうれしさと、そして嘆くよりも怒る気持ちで、これからも峠を越えていきたいと思う。支え支えられてこれからも自分というものを見つめて頑張っていこうと思う。

今日帰るとき、女の先生から声をかけられた。「授業、感動しました」と言ってくれた。僕は「学校に帰ってからも同和教育頑張ってください」と言った。後でもっといろいろな話をしたらよかったと思った。でも、多くの人の心が動いてくれたことがうれしい。こう言ってくれる人たちは学校に帰っても頑張ってくれると思う。僕も人任せにならないように頑張っていくつもりです。

**果てしない、そして長い道のりをこれからも光をたっぶり浴び、空気を思いきり吸って、仲間と共に歩み、足踏みすることがあっても、弱音を吐かず、希望のゴールへと進む。】**

第21回徳島県中学校同和教育研究大会で実施した公開授業の日に綴られたC君の生活ノートです。私は、こんな文章をよう書きません。すごい子どもたちと出会えたことに本当に感謝します。25年前が昨日のこのようによみがえってきました。そんな教育の営みを、これからも大事に大事に積み上げていきたいと思えます。

会場からいっぱい思いを語っていただきました。(中学生に温かいまなざしを送りながら)そして、震えながら語ってくれた中学生、本当に良かったです。胸が熱くなります。(会場に視線を返しながら)一生懸命

語っていただいた皆さん、本当にありがとうございました。そして、壇上の3人と、こういう場が持てたこと、原田彰先生に心から感謝したいと思います。先生の著された本がいろんなことを思い起こさせてくれました。同和教育の営みには、そんな力があります。そんな営みを大事にしていきたいと思います。

本当に長い長い研修会ですけど、皆さんの熱いまなざしにいっぱい力をもらいながら、話をさせていただきました。(元気よく)これで本年度の鳴門市人権地域フォーラムを終わります。ありがとうございました。(会場いっぱい大きな拍手)

#### 《司会者》

A先生、パネリストの皆様、ありがとうございました。閉会に際しまして、鳴門市人権教育推進協議会会長よりご挨拶いたします。

#### 《鳴門市人権教育推進協議会会長》

今回もこのように、この会場にたくさんの方がお越しいただき、本当にありがとうございました。県外からも多くの方が参加されております。皆様のご参加いただけることを主催者といたしまして、嬉しくお礼申し上げます。ありがとうございます。

さて、A先生をはじめ、パネリストの皆様、本当に熱いお話をしていただきまして、私たちの心にしっかりと伝わりました。また、フロアからの言葉にたくさんの重いものを感じました。本当に皆さん方からたくさんの拍手をいただきました。拍手をいただいた皆さんにもお礼と感謝を申し上げたいと思います。

この場を帰られましても、先ほどのパネリストの方からの言葉にも、こういう語れる場が様々な所で開催される、こういう場があることを願っているということがありましたが、皆様が地域に帰られまして、また、それぞれの職場で、「つながり合える、語り合える」そんな仲間が広がるような場を少しでもつくっていただければ、ありがたいことだと思っています。本当にいろいろお世話になりました。ありがとうございました。(拍手)

#### 《司会者》

以上をもちまして、本日のプログラムをすべて終了させていただきます。皆様方には、大変お暑い中ご参加いただきまして誠にありがとうございました。皆様お疲れ様でした。気をつけてお帰りください。

終了

#### 《参加者の意見・感想》

◎人権学習に寄せる素直な気持ち、一人一人の本当の思いを聞くことができよかったです。今後の自分の考え方に影響が出ていくと思われた。

◎学校関係者です。今回差別体験を語っていただいた方が、若い方だったので驚きました。授業の中で、体験を語っていただくゲストティチャーをお呼びすることがありますが、子どもたちとの年齢差があり、少し昔の話のような感じで受けとる子どももいるのが事実です。

私自身、今回のパネリストの方の話は、「今でも結婚差別が存在するんだ」と言葉は悪いですが、新鮮な感じで聞くことができました。部落差別が現在も存在するのを感じられました。

若い方のお話は、年齢が近いこともあり、自分事のように思われました。大変貴重な時間であり、学校関係者としても、しっかり取り組まなければと感じました。ありがとうございました。

◎本音を語る人たちの言葉を聞くと心が熱くなります。元気が出ます。「よし、頑張るぞ!」と元気がでます。今回もフォーラムに参加して、よかったです。ありがとうございました。

◎人権問題・同和問題って、心や無意識から生まれる問題で、全くなくすのは、すぐは無理かもしれない。でもこういった会を開催することは大事だし、もっと広げるべきだなと思いました。私自身も差別に負けな、また差別をしない自分になりたいと改めて思いました。

◎昨年から来させていただき、今回で2回目になりました。前回からテーマ『ひとごと』から『わがこと』へ』ということ意識して研修会に参加するようになりました。

同和問題を学ぶことが、再び差別を生んではないかと考えていた、最初の自分とは大きく意識が変わりました。そして、気持ちに寄り添いたい、一緒に進んでいきたいと考えた自分が、ふとしたことで本当に「わがこと」として考えられているのかと思ひ直すこともありました。頭では理解しているが、心では理解していない自分がまだいると気づかされました。

学ぶだけでなく、自分の心を拓いていかなければ、信頼関係が生まれず、本当の「わがこと」として考えられないと気づくことができました。また、来年も来たいと思います。ありがとうございました。

◎中学生時代の自分を振り返った元委員長さんの話はリアルでした。

◎差別の実態、差別の現状がわかって、とても心が熱くなりました。自分の差別心(意識)を見直し、身近なところから、少しずつできることはしていかなければならないと実感しました。

フロアからも、いろいろなお話が聞け、とても勉強になりました。

◎もっとももっとも勉強したいです。まだまだ勉強するつもりです。

◎このフォーラムを周辺に広げていければと思います。

何かの方法で内容を広報していただけたらと思います。

◎A先生や3人の方々の話を聞けて、部落差別について関心が高まった。

◎同和教育(人権教育)でつながった、深いつながりは、当時真剣に語り合った仲間だからと思いました。

◎私も同和教育主事をしていた頃の、地区の子どもたちの言葉がよみがえってきました。ありがとうございました。

◎3人のパネリストを中学校1年生のときから見ていたので、本当に久しぶりの再会となりました。成人になった姿を見てうれしく思いました。

全体学習でバンバン語っていた子どもたちが、25年以上もの年月を経て、どのように当時を振り返り、今を語るのか、とても興味をもって聞かせてもらいました。

『ひとごと』から『わがこと』へ』それが今の私の思いです。

◎「ひとごと」から「わがこと」へ、大いに教えられました。

◎お一人お一人の言葉に力があって勇気を分けてもらうことができました。私自身は中学校の教員ですが、今日のお話でうかがったようなつながりのある関係を授業や日々の生活の中で築いていきたいと感じました。A先生、今日はどうもありがとうございました。

◎全体授業を受けた子どもたちが、どう成長していったのか興味がありました。

3人ともいろいろな人生でしたが、中学校のときの全体学習が心の中にしっかり残っていて、安心したと共に改めて全体学習の「ステキ」さを再認識しました。

◎多くの方の本音が聞けたことがすばらしいと思った。

◎Bさんのレポート朗読がすばらしかった。

◎身近でないため部落差別に対して、こんなに熱くなったのは初めてです。

◎語り合うこと、ありのままの自分を語ることの大切さを再認識した。人権教育では同和問題の正しい知識を大人も子どもも知り、知らないことで過ちをおこさないようにしなければいけない。すばらしい取り組みが広がっていくことを願っている。

◎これからも自分の生き方として、人とのつながりを大切に生きていきたいと思います。本日はありがとうございました。

◎今日の中では、直接取り上げられていなかったが、チラシにあったように、インターネットなどによる悪質な人権侵害、それにともない(ライン等)報道される悲惨な事件。きっかけとなる書き込みをしたと思われるのは、同和教育、人権教育を受けてきた世代だと思われる。それを考えると、くやしい気がしてならない。今日の話で、自分を語ることは、自分の心と向き合うこと。それを経験していけばという話があった。たとえば、相手が目に見えなくても、相手の人権を侵害してしまうような書き込みをしようとした時、その自分の心に向き合うことができるかどうか、キーのような気がした。自分を語る、自分の心と向き合う人権教育を進めていかなければいけないと思った。ありがとうございました。

◎命、人権について、改めて考える機会となりました。

◎差別の現実を改めて深く知ることができ、自分にできることを考えることができました。ありがとうございました。

◎最近になって、なかなか自分の思いを素直に語れる場が少なくなったような気がします。このような会を大切にしてもらいたいです。

◎自分のことを自分の言葉で語ることは、とても勇気がいることだと感じました。一生懸命話す姿が心に響くのですが、なかなか自分をさらけ出して語るができませんでした。まずは、身近な存在の家族と話をしていきたいと思います。

◎今回は、A先生の教え子3名がパネリストになり自分を語ってくれました。私は20年前に全体学習(全同研の前日と思いますが)を参観し、とても感動しました。

教育は国家百年の計、人権教育も同じ、積み重ねの人権教育、地道な人権教育が大切であると改めて思いました。ありがとうございました。

◎私の息子は、高校1年生です。昨年の土庄町の人権フェスタに参加しています。心のつどいでは、自分の思いを語りました。後で話を聞くと「友だちが頑張ってるんやから、ほっとけんやろ。」と言いました。うれしかったです。中学生の時に貴重な体験ができてよかったと思います。

親子でも語り合っていきたいと思いました。今日はありがとうございました。

◎昨年から参加させていただいています。A先生の実践については、昔から存じていたので、興味をもって参加しました。生徒たちと共に作り上げた人権学習が、今もつながり合い、広がってきていることが素晴らしい。このフォーラムがもっと他の地域へも広がってもらえれば有難く思います。

この開催日が、昨年も今年も県人教の夏期講座の開催日が重なっています。開催日はずらすことはできないのでしょうか。

◎このような前向きな意見にふれることが、大切であることを痛感した。

◎今日一日ですごく私の考えが変わりました。私は中学生ですが、これから行う人権学習に役立てていきたいです。この会に参加してよかったです。

◎多くの人の話を聞くことができ、大変勉強になりました。

これからも参加して人権問題を学んでいきたいと思います。

◎参加者の語り、つながっていくことが、とてもよいと思いました。

◎人権・同和教育に「よろこび」を感じる集団づくりを自分も実践していきたいと思います。

◎マイクをにぎろうか大変迷いましたが、若い世代が立ち上がっていかねばと思い、お時間をいただきました。忘れてはいけない。それぞれのルーツや生い立ちがちがうけど、向き合うべきだと再認識しました。

◎25年前の板野中学校の生徒さんに合えるのを楽しみにしてきました。

一日一日を精一杯に生きたいと思います。今日はありがとうございました。

◎人権問題について、もっと理解を深めようという気持ちになりました。

◎思いを語り、思いをつないでいく素敵な会でした。それぞれの場所で自分と向き合い、他人(ひと)と向き合いつながっていくことができるようになってもらいたいです。(自分ももちろん！)



◎今年度もすばらしい時間を設定してくださりありがとうございました。

◎今は2016年です。時間の都合がつくときは、この会に参加させていただいています。初めて参加してかれこれ20年くらいたった気がします。参加するたび差別に対する自分の中の思い、日常での自分の生活ふりかえらせていただく機会になっています。一方で20年いろんな会に参加する中で、このスタイルで社会にもっと浸透していくには、どうすればもっと拡散できるか？語り続けることが大切なのはわかるとるつもりですが、限界がある。20年たってよい社会になっているのか。たぶんこの会がある限りジャブは打てとる。教育現場や社会にアップercutが打ちたいなあ。

社会の中で人権についてみんなて学ぶことは、すごい大切なことじゃと私は思っています。人を思いやる力、人を排除しない。いろんな価値観の人が暮らす社会の中で、合う人合わない人おると思うけど、批判することもあるかもしれんけど、すべてを否定しない。自分を主張しつつ、お互いを認めようとする関係の輪や、そんな教育の風潮が広がれば、世の中ももっといい空間になると思う。学校も家庭も職場もいろんなところがもっとよくなると思う。

人間らしく生きる。世代を超えたディスカッション。正直、部落差別してしまう人はしてしまう。せん人はせんとおれる。私に対して良い印象を受けない人もおると思う。

道徳の時間を待ち焦がれる。人を思いやる。人間らしく生きることはどういうことか？向上心を持った世代を超えた大討論会、ぜひいろんな場所で広がってほしいと思いました。

◎取り組みを続けていくこと、発信を続けていくことが大切だと改めて思いました。差別はする側の問題、する側の子ども、保護者を変えるために私たちも取り組みを続けていきます。

◎しばらく参加できていなかったのですが、来年も参加したいです。

◎世代を越えて、語り合うことの大切さやすばらしさを実感することができました。

今日参加した私たちが「わがこと」として語ることを広げていかなければと思いました。

◎人権教育に関わっていく上で、「ひとごと」ではなく「自分のこと」として考え関わっていくことの大切を再認識した。自分もこのような学習の機会に参加していかなければ、いつまでも「ひとごと」に感じ過ぎていたと思う。うわべだけのうわさのみを聞いて、自分も差別する側に知らず知らず立っていたかもしれない。知らないことはとても怖いことであり、「おかしい」と感じ、それを声にできるかは、それまでにどれだけ学びを深め、自分を語り、心を拓き、周りの人間との絆をつくることと考える。貴重なお話をありがとうございました。

◎「語る」ということの効果、力を実際に自分が実践して確かめたい。いろいろな方の言葉から学ぶものがいくつかあった。

◎A先生のを始め、パネリストの皆さんの意見でとても感動できました。

◎京都府の小学校から香川県小豆島の小学校の勤務に変わった際に、給食の質がずいぶん違ったことに驚いたものですが、加えて部落差別に関する学習の取り組みの違いにも驚きました。

今日、前に座っておられた3人のパネリストの方は、おそらく私と変わらない年齢で、自分の中学生時代にも、こういう経験があれば、ずいぶん違ったのかなあとも思いました。ただ、この場でお聞きした話が、また次に生きてくると確信いたしました。ありがとうございました。